

東京大学過去問題集 古文編

—BEYOND TRADITION—

出題年	文 科			理 科		
	番号	出 典	頁	番号	出 典 (文科と共通の場合は省略した)	頁
2024	二	藤原長子 『讃岐典侍日記』	3	二		3
2023	二	無住道暁 『沙石集』	6	二		6
2022	二	不詳 『浜松中納言物語』	9	二		9
2021	二	不詳 『落窪物語』	12	二		12
2020	二	不詳 『春日権現験記』	15	二		15
2019	二	関更 『誹諧世説』	18	二		18
2018	二	不詳 『太平記』	21	二		21
2017	二	紫式部 『源氏物語』 真木柱	24	二		24
2016	二	不詳 『あきぎり』	27	二		27
2015	二	不詳 『夜の寝覚』	30	二		30
2014	二	井原西鶴 『世間胸算用』	33	二		33
2013	二	不詳 『吾妻鏡』	36	二		36
2012	二	源俊頼 『俊頼髓脳』	39	二		39
2011	二	不詳 『十訓抄』	41	二		41
2010	二	橘成季 『古今著聞集』	43	二		43
2009	二	不詳 『うつほ物語』	45	二		45
2008	二	不詳 『古本説話集』	48	二		48
2007	二	不詳 『続古事談』	50	二		50
2006	二	不詳 『堤中納言物語』	53	二		53
2005	二	不詳 『住吉物語』	55	二		55
2004	二	武女 『庚子道の記』	58	二		58
2003	二	不詳 『古本説話集』	60	二		60
2002	二	不詳 『神道集』	62	二		62
2001	二	不詳 『栄花物語』	64	二	不詳 『十訓抄』	66
2000	二	源俊賢女 『成尋阿闍梨母集』	68	二		68

出題年	文 科			理 科		
	番号	出 典	頁	番号	出 典 (文科と共通の場合は省略した)	頁
1999	三	建部綾足『芭蕉翁頭陀物語』	70	三		70
	六	香川景樹『百首異見』	72			
1998	三	不詳『宇治拾遺物語』	74	三		74
	六	紫式部『源氏物語』椎本	76			
1997	三	上田秋成『春雨物語』	78	三		78
	六	不詳『栄花物語』	80			
1996	三	不詳『増鏡』	82	三		82
	六	不詳『唐物語』	84			
1995	三	本居宣長『玉勝間』	86	三		86
	六	紫式部『源氏物語』玉鬘	88			
1994	三	不詳『十訓抄』	90	三		90
	六	不詳『多武峰少将物語』	92			
1993	三	不詳『堤中納言物語』	94	三		94
	六	大神基政『竜鳴抄』	96			
1992	三	鴨長明『発心集』	98	三		98
	六	紫式部『源氏物語』手習	99			
1991	三	不詳『大和物語』	101	三		101
	六	不詳『今鏡』	103			
1990	三	不詳『宇治拾遺物語』	105	三		105
	六	不詳『伊勢物語』	107			
1989	三	不詳『続古事談』	108	三		108
	六	紫式部『源氏物語』竹河	110			

第二 問

(二〇二四年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。堀河天皇は病のため崩御し、看病にあたった作者も家で喪に服している。そこへ、女官の弁の三位を通じて堀河天皇の父白河上皇(院)から仰せがあった。新天皇は、幼い鳥羽天皇(堀河天皇の子)である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かくいふほどに、十月になりぬ。「弁の三位殿より御文」といへば、取り入れて見れば、「年ごろ、宮仕へせさせたまふ御心のありがたさなど、よく聞きおかせたまひたりしかばにや、院よりこそ、この内にさやうなる人の大切なり、登時参るべきよし、おほせごとあれば、さる心地せさせたまへ」とある、見るにぞ、あさましく、ひがめかと思ふまであきられける。おはしまししをりより、かくは聞こえしかど、いかにも御いらへのなかりしには、さらでもとおぼしめすにや、それを、いつしかといひ顔に参らんこと、あさましき。周防の内侍、後冷泉院におくれまゐらせて、後三条院より、七月七日参るべきよし、おほせられたりけるに、

天の川おなじ流れと聞きながらわたらんことはなほぞかなしき

とよみけんこそ、げにとおぼゆれ。

「故院の御かたみには、ゆかしく思ひまゐらすれど、さし出でんこと、なほあるべきことならず。そのかみ立ち出でしに、はればれしさは思ひあつかひしかど、親たち、三位殿などしてせられんことをとなん思ひて、いふべきことならざりしかば、心のうちばかりにこそ、海人の刈る藻に思ひみだれしか。げに、これも、わが心にはまかせずともいひつべきことなれど、また、世を思ひ捨てつと聞かせたまはば、さまで大切にもおぼしめさじ」と思ひみだれて、いますこし月ごろよりももの思ひ添ひぬる心地して、「いかなるついでを取り出でん。さすがに、われと削ぎすてんも、昔物語にも、かやうにしたる人をば、人も『うとましの心や』などこそいふめれ、わが心にも、げにさおぼゆることなれば、さすがにまめやかにも思ひ立たず。かやうにて心づから弱りゆ

けかし。さらば、ことつけても」と思ひつづけられて、日ごろ経るに、「御乳母^{めのと}たち、まだ六位にて、五位にならぬかぎり、もの参らせぬことなり。この二十三日、六日、八日ぞよき日。とく、とく」とある文、たびたび見ゆれど、思ひ立つべき心地もせず。「過ぎにし年月だに、わたくしのもの思ひのちは、人などにたちまじるべき有様にもなく、見苦しくやせおとろへにしかば、いかにせましとのみ思ひあつかはれしかど、御心のなつかしさに、人たちなどの御心も、三位のさてもものしたまへば、その御心にしたがはじとかや、はかなきことにつけても、用意せられてのみ過ぎしに、いまさらに立ち出でて、見し世のやうにあらんこともかたし。君はいはけなくおはします。さてならひにしものぞとおぼしめすこともあらじ。さらんままには、昔のみ恋しくて、うち見ん人はよしとやはあらん」など思ひつづくるに、袖のひまなくぬるれば、

乾くまもなき墨染めの袂^{たもと}かなあはれ昔のかたみと思ふに

〔注〕 ○弁の三位殿——鳥羽天皇の乳母、藤原光子。

○この内——鳥羽天皇の御所。

○登時——すぐに。

○周防の内侍——平仲子。仕えていた後冷泉天皇が崩御すると家に下がったが、後冷泉天皇の弟、後三条天皇の即位後、再び出仕した。

○故院——亡き堀河天皇。

○三位殿——「弁の三位殿」とは別人で、筆者の姉、藤原兼子。やはり宮中に出仕している。この下の「三位」も兼子を指す。

○海人の刈る藻に——「みだれ」を引き出す序詞的表現。

○もの参らせぬことなり——天皇の食事の世話が出来ないことをいう。

○わたくしのもの思ひ——筆者の一身上の悩み。

設 問

- (一) 傍線部ア・ウ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「いつしかといひ顔に参らんこと、あさましき」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「いかなるついでを取り出でん」(傍線部エ)とはどういうことか、言葉を補って説明せよ。
- (四) 「うち見ん人はよしとやはあらん」(傍線部カ)とあるが、なぜ「うち見ん人」は良いとは思わないのか、説明せよ。
- (五) 「乾くまもなき墨染めの袂かなあはれ昔のかたみと思ふに」(傍線部キ)の和歌の大意を説明せよ。

第二 問

(二〇二三年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は『沙石集』の一話「耳売りたる事」である。これを読んで、後の設問に答えよ。

南都に、ある寺の僧、耳のびく厚きを、ある貧なる僧ありて、「たべ。御坊の耳買はん」と云ふ。「とく買ひ給へ」と云ふ。「いかほどに買ひ給はん」と云ふ。「五百文に買はん」と云ふ。「さらば」とて、銭を取りて売りつ。その後、京へ上りて、相者のもとに、耳売りたる僧と同じく行く。相して云はく、「福分おはしませず」と云ふ時に、耳買ひたる僧の云はく、「あの御坊の耳、その代銭かくのごとき数にて買ひ候ふ」と云ふ。「さては御耳にして、明年の春のころより、御福分かなひて、御心安からん」と相す。さて、耳売りたる僧をば、「耳ばかりこそ福相おはすれ、その外は見えず」と云ふ。かの僧、当時まで世間不階の人なり。「かく耳売る事もあれば、貧窮を売ることもありぬべし」と思ひ、南都を立ち出でて、東の方に住み侍りけるが、学生にて、説法などもする僧なり。

ある上人の云はく、「老僧を仏事に請する事あり。身老いて道遠し。予に代はりて、赴き給へかし。ただし三日路なり。想像するに、施物十五貫文には過ぐべからず。またこれより一日路なる所に、ある神主の有徳なるが、七日逆修をする事あり。これも予を招請すといへども行かんことを欲せず。これは、一日に無下ならば五貫、ようせば十貫づつはせんずらん。公、いづれに行き給はん」と云ふ。かの僧、「仰すまでもなし。遠路を凌ぎて、十五貫文など取り候はんより、一日路行きて七十貫こそ取り候はめ」と云ふ。「しからば」とて、一所へは別人をして行かしむ。神主のもとへはこの僧行きけり。

既に海を渡りて、その処に至りぬ。神主は齡八旬に及びて、病床に臥したり。子息申しけるは、「老体の上、不例日久しくして、安泰頼み難く候へども、もしやと、先づ祈禱に、真読の般若ありたく候ふ」と申す。「また、逆修は、いかさま用意仕り候ひて、やがてひきつぎ仕り候はん」と云ふ。この僧思ふやう、「先づ般若の布施取るべし。また逆修の布施は置き物」と思ひ

て、「安きことにて候ふ。参るほどにては、仰せに従ふべし。何れも得たる事なり。殊に祈祷は吾が宗の秘法なり。必ず靈驗あるべし」と云ふ。

「さて、酒はきこしめすや」と申す。大方はよき上戸にてはあれども、「酒を愛すと云ふは、信仰薄からん」と思ひて、「いかにも貴げなる体ならん」と思ひて、「一滴も飲まず」と云ふ。「しからば」とて、温かなる餅を勧めけり。よりて、大般若經の啓白して、かの餅を食はしめて、「これは大般若の法味、不死の藥にて候ふ」とて、病者に与へけり。病者貴く思ひて、臥しながら合掌して、三宝諸天の御恵みと信じて、一口に食ひけるほどに、日ごろ不食の故、疲れたる氣にて、食ひ損じて、むせけり。女房、子供、抱へて、とかくしつれども、かなはずして、息絶えにければ、中々とかく申すばかりなくして、「孝養の時こそ、案内を申さめ」とて返しけり。

歸る路にて、風波荒くして、浪を凌ぎ、やうやう命助かり、衣装以下損失す。また今一所の経営は、布施、巨多なりける。これも、耳の福売りたる効かと覚えたり。万事齟齬する上、心も卑しくなりけり。

〔注〕 ○耳のびく——耳たぶ。 ○五百文——「文」は通貨単位。千文が錢一貫（一貫文）に相当する。

○相者——人相見。 ○世間不階——暮らし向きがよくないこと。

○逆修——生前に死後の冥福を祈る仏事を修すること。 ○無下——最悪。 ○八旬——八十。

○不例——病氣。 ○真読の大般若——『大般若經』六百卷を省略せずに読誦すること。

○置き物——ここでは、手に入つたも同然なことをいう。 ○啓白——法会の趣旨や願意を仏に申し上げること。

○法味——仏法の妙味。 ○孝養——亡き親の追善供養。

設 問

- (一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。
- (二) 「何れも得たる事なり」(傍線部エ)について、「何れも」の中身がわかるように現代語訳せよ。
- (三) 僧が「一滴も飲まず」(傍線部オ)と言ったのはなぜか、説明せよ。
- (四) 「中々とかく申すばかりなくして」(傍線部カ)について、状況がわかるように現代語訳せよ。
- (五) 「心も卑しくなりにけり」(傍線部キ)とはどういうことか、具体的に説明せよ。

第二 問

(二〇二二年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は『浜松中納言物語』の一節である。中納言は亡き父が中国の御門みかどの第三皇子に転生したことを知り、契りを結んだ大将殿の姫君を残して、朝廷に三年間の暇いさまを請い、中国に渡った。そして、中納言は物忌ものいみで籠もる女性と結ばれたが、その女性おんなは御門の後であり、第三皇子の母であった。后は中納言との間の子(若君)を産んだ。三年後、中納言は日本に戻る。以下は、人々が集まる別れの宴で、中納言が后に和歌を詠み贈る場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

忍びがたき心のうちをうち出いでぬべきにも、さすがにあらアず、わりなくかなしきに、皇子みこもすこし立ち出でさせ給ふに、御前なる人々も、おのおのものうち言ふにやと聞こゆるまぎれに、

ふたたびと思ひ合はするかたもなしいかに見し夜の夢にかあるらむ
いみじう忍びてまぎらはかし給へり。

夢とだに何か思ひも出でつらむたイだまぼろしに見るは見るかは

忍びやるべうもあらぬ御けしきの苦しさに、言ふともなく、ほのかにまぎらはして、すべり入り給ひぬ。おぼろけに人目思はずは、ひきもとどめたてまつるべけれど、かしウこう思ひつつむ。

内裏うちより皇子出でさせ給ひて、御遊びはじまる。何のものの音もおぼえぬ心地すれど、今宵こよひをかぎりと思へば、心強く思ひ念じて、琵琶びは賜はり給ふも、うつつの心地はせず。御簾みすのうちに、琴きんのことかき合はせられたるは、未央宮びやうきうにて聞きしなるべし。やがてその世の御おくりものに添へさせ給ふ。「今は」といふかひなく思ひ立ち果てぬるを、いとなつかしうのたまはせつる御けはひ、ありさま、耳につき心にしみて、肝消えまどひ、さらにものおぼえ給はず。「日本に母上をはじめ、大将殿の君に、見馴みなれしほどなく引き別れにしあはれなど、たぐひあらじと人やりならずおぼえしかど、ながらへば、三年がうちに行き帰りなむと思

ふ思ひになぐさめしにも、胸のひまはありき。これは、またかへり見るべき世かは」^オと思ひとぢむるに、よろづ目とまり、あはれなるをさることにて、後の、今ひとたびの行き逢ひをば、かけ離れながら、おほかたにいとなつかしうもてなしおぼしたるも、さまことなる心づくしいとどまさりつつ、わが身人の御身、さまざまに乱れがはしきこと出で来ぬべき世のつましさを、おぼしつつめることわりも、ひたぶるに恨みたてまつらむかたなければ、いかさまにせば、と思ひ乱るる心のうちは、言ひやるかたもなかりけり。「いとせめてはかけ離れ、なさけなく、つらくもてなし給はばいかがはせむ。若君のかたざまにつけても、われを^カばひたぶるにおぼし放たぬなんめり」^キと、推し量らるる心ときめきても、消え入りぬべく思ひ沈みて、暮れゆく秋の別れ、なほいとせちにやるかたなきほどなり。御門、東宮をはじめたてまつりて、惜しみかなしませ給ふさま、わが世を離れしにも、やや立ちまさりたり。

〔注〕 ○琴のこと——弦が七本の琴^{こと}。

○未央宮にて聞きしなるべし——中納言は、以前、未央宮で女房に身をやつした後の琴のことの演奏を聞いた。

○その世——ここでは中国を指す。

○東宮——御門の第一皇子。

○わが世——ここでは日本を指す。

設 問

- (一) 傍線部ア・ウ・キを現代語訳せよ。
- (二) 「ただまぼろしに見るは見るかは」(傍線部イ)の大意を示せ。
- (三) 「たぐひあらじと人やりならずおぼえしかど」(傍線部エ)とあるが、何についてどのように思ったのか、説明せよ。
- (四) 「よろづ目とまり、あはれなるをさることにて」(傍線部オ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (五) 「われをばひたぶるにおぼし放たぬなんめり」(傍線部カ)とあるが、なぜそう思うのか、説明せよ。

第二 問

(二〇二一年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は『落窪物語』の一節である。落窪の君は源中納言の娘で、高貴な実母とは死別し、継母に*まはは*にいじめられて育ったが、ひそかに道頼と結婚して引き取られて、幸福に暮らしている。少将だった道頼は今では中納言に昇進し、衛門督を兼任している。以下は、道頼が継母たちに報復する場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かくて、「今年の賀茂の祭、いとをかしからむ」と言へば、衛門督の殿、「さうさうしきに、御達に物見せむ」とて、かねてより御車新しく調じ、人々の装束とも賜びて、「よろしうせよ」とのたまひて、いそぎて、その日になりて、一条の大路の打杭打たせ給へれば、「今は」と言へども、誰ばかりかは取らむと思して、のどかに出て給ふ。

御車五つばかり、大人二十人、二つは、童四人、下仕四人乗りたり。男君具し給へれば、御前、四位五位、いと多かり。弟の侍従なりしは今少将、童におはせしは兵衛佐、「もろともに見む」と聞こえ給ひければ、皆おはしたりける車どもさへ添はりたれば、二十あまり引き続き、皆、次第どもに立ちにけりと見おはするに、わが杭したる所の向かひに、古めかしき檳榔毛一つ、網代一つ立てり。

御車立つるに、「男車の交じらひも、疎き人にはあらで、親しう立て合はせて、見渡しの北南に立てよ」とのたまへば、「この向かひなる車、少し引き遣らせよ。御車立てさせむ」と言ふに、しふねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせ給ふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中納言のにもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかでこの打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少し引き遣らせよ」とのたまはすれば、雑色ども寄りて車に手をかくれば、車の人出で来て、「など、また真人たちのかうする。いたう逸る雑色かな。豪家だつるわが殿も、中納言におはしますや。一条大路も皆領じ給ふべきか。強法す」と笑ふ。「西東、斎院もおちて、避き道しておはすべかなるは」と、口悪しき男また言へば、「同じものと、殿を一つ口にな言ひそ」などいさかひ

て、えとみに引き遣らねば、男君たちの御車ども、まだえ立てず。君、御前の人、左衛門の蔵人を召して、「かれ、行ひて、少し遠くなせ」とのたまへば、近く寄りて、ただ引きに引き遣らす。男ども少なくて、えふと引きとどめず。御前、三四人ありけれど、「益なし。この度、いさかひしつべかめり。ただ今の太政大臣の尻は蹴るとも、この殿の牛飼ひに手触れてむや」と言ひて、人の家の門に入りて立てり。目をはつかに見出して見る。

少し早う恐ろしきものに世に思はれ給へれど、実の御心は、いとなつかしう、のどかになむおはしける。

〔注〕 ○賀茂の祭——陰曆四月に行われる賀茂神社の祭。齋院の御禊がある。葵祭。

○打杭——打ち込んで立てる杭。ここでは、車を停める場所を確保するための杭。

○御前——車列の先払いをする供の人。

○侍従なりしは今は少将、童におはせしは兵衛佐——それぞれ昇進したということ。

○次第どもに——身分の順に整然と。

○檳榔毛一つ、網代一つ——いずれも牛車の種類。「檳榔毛」は上流貴族の常用、「網代」は上流貴族の略式用。

○見渡しの北南に——互いに見えるように、一条大路の北側と南側に。

○雑色——雑役をする従者。

○真人たち——あなたたち。

○豪家だつるわが殿——権門らしく振舞う、あなたたちのご主人。

○強法——横暴なこと。

○左衛門の蔵人——落窪の君の侍女阿漕の夫、帯刀。道頼と落窪の君の結婚に尽力した。

○人の家の門に入りて——牛車から離れて、よその家の門に入って。

設 問

- (一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。
- (二) 「しふねがりて聞かぬに」(傍線部エ)とは誰がどうしたのか、説明せよ。
- (三) 「一条の大路も皆領じ給ふべきか」(傍線部オ)とはどういうことか、主語を補って現代語訳せよ。
- (四) 「殿を一つ口にな言ひそ」(傍線部カ)とはどういうことか、「一つ口」の内容を明らかにして説明せよ。
- (五) 「この殿の牛飼ひに手触れてむや」(傍線部キ)とは誰をどのように評価したものか、説明せよ。

第二 問

(二〇二〇年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、春日明神の靈驗に関する話を集めた『春日権現験記』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

興福寺の壹和僧都は、修学相兼ねて、才智たぐひなかりき。後には世を遁れて、外山といふ山里に住みわたりけり。そのかみ、維摩の講師を望み申しけるに、思ひの外に祥延といふ人に越されにけり。なにごとく前世の宿業にこそ、とは思ひのどむれども、その恨みしのびがたぐおぼえければ、ながく本寺論談の交はりを辞して、斗敷修行の身とならんと思ひて、弟子どもにもかくとも知らせず、本尊・持経ばかり竹の笈に入れて、ひそかに三面の僧坊をいでて四所の靈社にまうでて、泣く泣く今は限りの法施を奉りけん心の中、ただ思ひやるべし。さすがに住みこし寺も離れまうく、馴れぬる友も捨てがたけれども、思ひたちぬることなれば、行く先いづくどに定めず、なにとなくあづまのかたに赴くほどに、尾張の鳴海潟に着きぬ。

潮干のひまをうかがひて、熱田の社に参りて、しばしば法施をたむくるほどに、けしかる巫女来て、壹和をさして言ふやう、「汝、恨みを含むことありて本寺を離れてまどへり。人の習ひ、恨みには堪へぬものなれば、ことわりなれども、心かなはぬはこの世の友なり。陸奥国えびすが城へと思ふとも、それもまたつらき人あらば、さていづちか赴かん。いそぎ本寺に歸りて、日ごろの望みを遂ぐべし」と仰せらるれば、壹和頭を垂れて、「思ひもよらぬ仰せかな。かかる乞食修行者になにの恨みか侍るべき。あるべくもなきことなり、いかにかくは」と申すとき、巫女大いにあざけりて、

つめども隠れぬものは夏虫の身より余れる思ひなりけり

といふ歌占をいだして、「汝、心幼くも我を疑ひ思ふかは。いざさらば言ひて聞かせん。汝、維摩の講師を祥延に越えられて恨みをなすにあらずや。かの講師と言ふはよな、帝釈宮の金札に記するなり。そのついで、すなはち祥延・壹和・喜操・観理とあるなり。帝釈の札に記するも、これ昔のしるべなるべし。我がしわざにあらず。とくとく愁へを休めて本寺に歸るべきなり。和光同

塵は結縁の始め、八相成道は利物の終りなれば、神といひ仏といふその名は変はれども、同じく衆生を哀れぶこと、悲母の愛子のごとし。汝は情けなくも我を捨るとはいへども、我は汝を捨てずして、かくしも慕ひ示すなり。春日山の老骨、既に疲れぬ」とて、上がらせ給ひにければ、壹和、かたじけなさ、たふとさ、ひとかたならず、渴仰の涙を抑へていそぎ帰り上りぬ。その後、次の年の講師を遂げて、四人の次第、あたかも神託に違はざりけりとなる。

〔注〕 ○興福寺——奈良にある藤原氏の氏寺。隣接する藤原氏の氏社で春日明神を祭神とする春日大社とは関係が深い。

○維摩の講師——興福寺の重要な法会である維摩会で、講義を行う高僧。

○祥延——僧の名。

○斗敷——仏道修行のために諸国を歩くこと。

○三面の僧坊——興福寺の講堂の東・西・北を囲んで建つ、僧侶達の住居。

○四所の霊社——春日大社の社殿。四所の明神を、連なった四つの社殿にまつる。

○鳴海潟——今の名古屋市にあった干潟。東海道の鳴海と、熱田神宮のある熱田の間の通り道になっていた。

○夏虫——ここでは蛍のこと。

○歌占——歌によって示された託宣。

○帝釈宮——仏法の守護神である帝釈天の住む宮殿。

○喜操・観理——ともに僧の名。

○和光同塵——仏が、衆生を救うために仮の姿となって俗世に現れること。

○八相成道——釈迦が、衆生を救うためにその一生に起こした八つの大事。

○利物——衆生に恵みを与えること。

設問

- (一) 傍線部イ・ウ・エを現代語訳せよ。
- (二) 「思ひのどむれども」(傍線部ア)とあるが、何をどうしたのか、説明せよ。
- (三) 「あるべくもなきことなり、いかにかくは」(傍線部オ)とあるが、これは壹和の巫女に対するどのような主張であるか、説明せよ。
- (四) 歌占「つつめども隠れぬものは夏虫の身より余れる思ひなりけり」(傍線部カ)に示されているのはどのようなことか、説明せよ。
- (五) 「あたかも神託に違はざりけりとなん」(傍線部キ)とあるが、神託の内容を簡潔に説明せよ。

第二 問

(二〇一九年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、らんこう 蘭更編『はいかいせせつ 誹諧世説』の「らんせつ 嵐雪が妻、猫を愛する説」である。これを読んで、後の設問に答えよ。

嵐雪が妻、からねて 唐猫のかたちよきを愛して、美しきふとんをしかせ、食ひ物も常ならぬ器に入れて、朝夕ひざもとをはなさざりけるに、門人・友どちなどにもうるさく思ふ人もあらんと、嵐雪、折々は、「けもの 獣を愛するにも、い 程あるべき事なり。人にもまさりたる敷き物・器・食ひ物とても、忌むべき日にも、猫には生なまざかなを食はするなど、よからぬ事」とつぶやきけれども、妻しのびてもこれを改めざりけり。

さてある日、妻の里へ行きけるに、るす 留守の内、外へ出でざるやうに、かの猫をつなぎて、例のふとんの上に寝させて、さかななど多く食はせて、くれぐれ綱ゆるさざるやうに頼みおきて出で行きぬ。嵐雪、かの猫をいくへなりとも遣はし、妻をたばかりて猫を飼ふ事をやめんと思ひ、かねて約しおける所ありければ、遠き道を隔て、人して遣はしける。妻、日暮れて帰り、まづ猫を尋ぬるに見えず。「猫はいづくへ行き侍る」と尋ねければ、「されば、そのあとを追ひけるにや、しきりに鳴き、綱を切るばかりに騒ぎ、毛も抜け、首もしまるほどなりけるゆゑ、あまり苦しからんと思ひ、綱をゆるしてさかななどあてけれども、食ひ物も食はで、ただうろうろと尋ぬるけしきにて、かじぐち 門口・せどぐち 背戸口・二階など行きつ戻りつしけるが、それより外へ出で侍るにや、近隣を尋ぬれども今に見えず」と言ふ。妻、泣き叫びて、ウ 行くまじき方までも尋ねけれども、帰らずして、三日、四日過ぎければ、妻、たもと 袂をしぼりながら、

猫の妻いかなる君のうばひ行く 妻

かく言ひて、ここちあしくなり侍りければ、妻の友とする隣家の内室、これも猫を好きけるが、嵐雪がはかりて他所へ遣はしける事を聞き出だし、ひそかに妻に告げ、「無事にて居侍るなり。必ず心を痛め給ふ事なかれ。エ 我が知らせしとなく、何町、何方へ取

り返しに遣はし給へ」と語りければ、妻、「かかる事のあるべきや。我が夫、猫を愛する事を憎み申されけるが、さては我をはかりてのわざなるか」と、さまざま恨みいどみ合ひける。嵐雪もあらはれたる上は是非なく、「実に汝をはかりて遣はしたるなり。常々言ふごとく、余り他に異なる愛し様なり。はなはだ悪しき事なり。重ねて我が言ふごとくなさずば、取り返すまじ」と、さまざま争ひけるに、隣家・門人などいろいろ言ひて、妻にわびさせて、嵐雪が心をやはらげ、猫も取り返し、何事なくなりけるに、睦月はじめの夫婦いさかひを人々に笑はれて

喜ぶを見よや初ねの玉ばは木 嵐雪

〔注〕 ○嵐雪——俳人。芭蕉の門人。

○唐猫——猫。もともと中国から渡来したためこう言う。

○門口・背戸口——家の表側の出入り口と裏側の出入り口。

○内室——奥様。

○玉ばは木——正月の初子の日に、蚕部屋を掃くために使う、玉のついた小さな箒。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・カを現代語訳せよ。
- (二) 「行くまじき方までも尋ねけれども」(傍線部ウ)を、誰が何をどうしたのかわかるように、言葉を補い現代語訳せよ。
- (三) 「我が知らせしとなく、何町、何方へ取り返しに遣はし給へ」(傍線部エ)とあるが、隣家の内室は、どうせよといっているのか、説明せよ。
- (四) 「さては我をはかりてのわざなるか」(傍線部オ)とあるが、嵐雪は妻をどうだましたのか、説明せよ。
- (五) 「余り他に異なる愛し様」(傍線部キ)とあるが、どのような「愛し様」か、具体的に説明せよ。

第二 問

(二〇一八年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は『太平記』の一節である。美しい女房の評判を聞いた武蔵守高師直は、侍従の局に仲立ちを依頼したが、すでに人妻となっている女房は困惑するばかりであった。これを読んで、後の設問に答えよ。

侍従歸りて、「かくこそ」と語りければ、武蔵守いと心を空に成して、「たび重ならば情けに弱ることもこそあれ、文をやりてみばや」とて、兼好と言ひける能書の遁世者をよび寄せて、紅葉襲の薄様の、取る手も燻ゆるばかりに焦がれたるに、言葉を尽くしてぞ聞こえける。返事遅しと待つところに、使ひ歸り来て、「御文をば手に取りながら、あけてだに見たまはず、庭に捨てられたるを、人目にかげじと、懷に入れ歸りまゐつて候ひぬる」と語りければ、師直大きに氣を損じて、「いやいや物の用に立たぬものは手書きなりけり。今日よりその兼好法師、これへ寄すべからず」とぞ怒りける。

かかるところに薬師寺次郎左衛門公義、所用の事有りて、ふとさし出でたり。師直かたはらへ招いて、「ここに、文をやれども取つても見ず、けしからぬ程に氣色つれなき女房のありけるをば、いかがすべき」とうち笑ひければ、公義「人皆岩木ならねば、いかなる女房も、慕ふに靡かぬ者や候ふべき。今一度御文を遣はされて御覽候へ」とて、師直に代はつて文を書きけるが、なかなか言葉はなくて、

返すさへ手や触れけんと思ふにぞわが文ながらうちも置かれず

押し返して、仲立ちこの文を持ちて行きたるに、女房いかが思ひけん、歌を見て顔うちあかめ、袖に入れて立ちけるを、仲立ちさてはたよりあしからずと、袖をひかへて、「さて御返事はいかに」と申しければ、「重きが上の小夜衣」とばかり言ひ捨てて、内へ紛れ入りぬ。暫くあれば、使ひ急ぎ歸つて、「かくこそ候ひつれ」と語るに、師直うれしげにうち案じて、やがて薬師寺をよび寄せ、「この女房の返事に、『重きが上の小夜衣』と言ひ捨てて立たれけると仲立ちの申すは、衣・小袖をととのへて送れとにや。

その事ならば、いかなる装束なりとも仕立てんずるに、いと安かるべし。これは何と言ふ心ぞ」と問はれければ、公義「いやこれはさやうの心にては候はず、新古今の十戒じっかいの歌に、

さなきだに重きが上の小夜衣こやえわがつまならぬつまな重ねそ

と言ふ歌の心を以つて、人目ばかりを憚はばり候ふものぞとこそ覚えて候へ」と歌の心を釈しければ、師直大きに悦よろこんで、「ああ御辺ごへんは弓箭ゆみやの道のみならず、歌道にさへ無双の達者なりけり。いで引出物せん」とて、金作りの丸鞆まるざやの太刀たち一振り、手づから取り出して薬師寺にこそ引かれけれ。兼好が不祥、公義が高運、栄枯一時に地をかへたり。

〔注〕 ○兼好——兼好法師。『徒然草』の作者。

○紅葉襲の薄様——表は紅、裏は青の薄手の紙。

○薬師寺次郎左衛門公義——師直の家来で歌人。

○仲立ち——仲介役の侍従。

○小夜衣——着物の形をした寝具。普通の着物よりも大きく重い。

○十戒の歌——僧が守るべき十種の戒律について詠んだ歌。

○丸鞆——丸く削った鞆。

設 問

- (一) 傍線部ア・イ・エを現代語訳せよ。
- (二) 「わが文ながらうちも置かれず」(傍線部ウ)とあるが、どうして自分が出した手紙なのに捨て置けないのか、説明せよ。
- (三) 「さやうの心」(傍線部オ)とは、何を指しているか、説明せよ。
- (四) 「わがつまらぬつまな重ねそ」(傍線部カ)とはどういうことか。掛詞に注意して女房の立場から説明せよ。
- (五) 「人目ばかりを憚り候ふものぞ」(傍線部キ)とあるが、公義は女房の言葉をどう解釈しているか、説明せよ。

第二 問

(二〇一七年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、『源氏物語』真木柱巻の一節である。玉鬘たまかずらは、光源氏（大殿）のかつての愛人であった亡き夕顔と内大臣との娘だが、両親と別れて筑紫国で育った。玉鬘は、光源氏の娘として引き取られ多くの貴公子達の求婚を受けるかたわら、光源氏にも思慕の情を寄せられ困惑する。しかし意外にも、求婚者の中でも無粋な鬘黒ひげくろ大将の妻となって、その邸に引き取られてしまった。以下は、光源氏が結婚後の玉鬘に手紙を贈る場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

二月にもなりぬ。大殿は、さてもつれなきわざなりや、いとかう際々きはきはしうとしも思はでたゆめられたる妬ねたさを、人わろく、すべて御心にかからぬをりなく、恋しう思ひ出でられたまふ。宿世すくせなどいふもののおろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかしと起き臥ふし面影にぞ見えたまふ。大将の、をかしやかにわらかなる気けもなき人に添ひゐたらむに、はかなき戯たはぶれ言もつつましうあいなく思おもはれて、念じたまふを、雨いたう降りていとのどやかなるころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて、語らひたまひしさまなどの、いみじう恋しければ、御文奉りたまふ。右近がもとに忍びて遣はすも、かつは思はむことを思すに、何ごともえつづけたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

「かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかにしのぶや

つれづれに添へても、恨めしう思ひ出でらること多うはべるを、いかでかは聞こゆべからむ」などあり。

隙ひまに忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にもほど経るままに思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などえのたまはぬ親にて、げに、いかでかは対面もあらむとあはれなり。時々むつかしかりし御気色けしきを、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思しつづくれど、右近はほの気色見けり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。御返り、「聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて書きたまふ。

「ながすめる軒のきのしづくに袖ぬれてうたかた人オをしのばざらめや

ほどふるころは、げにことなるつれづれもまさりはべりけり。あなかしこカとるやゑやしく書きなしたまへり。

ひきひろげて、玉水のこぼるるやうに思さるるを、人も見ばうたてあるべしとつれなくもてなしたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、尚侍かむの君を朱雀院すざくゐんの後の切せちにとり籠めたまひしをりなど思し出づれど、さし当たりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。好キいたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわびたまひて、御琴か掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音つまおと思ひ出でられたまふ。

〔注〕 ○つれなきわざ——鬚黒が玉鬘を、光源氏に無断で自分の邸に引き取ったこと。

○紛らはし所——光源氏が立ち寄っていた玉鬘の居所。

○右近——亡き夕顔の女房。玉鬘を光源氏の邸に連れてきた。

○隙に忍びて——鬚黒が不在の折にこっそりと。

○うたかた——泡がはかなく消えるような少しの間も。

○尚侍の君を朱雀院の後の切にとり籠めたまひしをり——当時の尚侍の君であつた臈月夜おぼろつきよを、朱雀院の母后である弘徽こき殿でん后が強引に光源氏に逢えないようになさつた時のこと。現在の尚侍の君は、玉鬘。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「げに、いかでかは対面もあらむとあはれなり」(傍線部ウ)とは誰のどのような気持ちか、説明せよ。
- (三) 「いかなりけることならむ」(傍線部エ)とは、誰が何についてどのように思っているのか、説明せよ。
- (四) 「ゐやゐやしく書きなしたまへり」(傍線部カ)とあるが、誰がどのようにしたのか、説明せよ。
- (五) 「好いたる人」(傍線部キ)とは、ここではどういふ人のことか、説明せよ。

第二 問

(二〇一六年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、鎌倉時代成立とされる物語『あきぎり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。なお、本文中の「宰相」は姫君の「御乳母^{めのと}」と同一人物であり、「少将」はその娘で、姫君の侍女である。

(尼上ハ)まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君のこのみ思ふを、なからむ^アあとも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ。今は宰相よりほかは、誰をか頼み給はむ。我なくなるとも、父君生きてましまさば、さりととも心安かるべきに、誰に見譲^{ゆづ}るともなくて、消えなむのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給はず、御涙もとどめがたし。

まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしはものも申さず。ややためらひて、「いかでかおろかなるべき。おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世にながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当てて、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさまなるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもののおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げにただ今は限りと思^{おも}ひて、念仏声高に申し給ひて、眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。

姫君は、ただ同じさまにと、こがれ給へども、かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもあるべきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事もしかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御ありさまを嘆きあたり。大殿もやうやうに申し慰め給へども、生きたる人とも見え給はず。

その夜、やがて阿弥陀^{あみだ}の峰といふ所にをさめ奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。悲^エしとも、世の常なり。大殿は、こまごまものなどのたまへること、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそとおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて申し慰め奉れ。御忌み離れなば、やがて迎^オえ奉るべし。心ぼそからでおはしませ」など、頼もしげにのたまひおき、帰り給ひぬ。

中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひやり、心苦しくて、鳥辺野^{とりべの}の草とも、さこそ思し嘆くらめと、あはれなり。夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきにやと思すぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもとまで、

鳥辺野^カの夜半^{よは}の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ
とあれども、御覧^キじだに入れねば、かひなくてうち置きたり。

〔注〕 ○御出で立ち——葬送の準備。

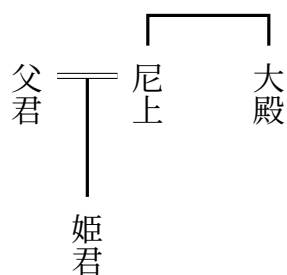
○しかるべき御こと——前世からの因縁。

○阿弥陀の峰——現在の京都市東山区にある阿弥陀ヶ峰。古くは、広くこの一帯を鳥辺野と呼び、葬送の地であった。

○御忌み離れなば——喪が明けたら。

○中将——姫君のもとにひそかに通っている男性。

【人物関係図】



設 問

- (一) 傍線部エ・オ・キを現代語訳せよ。
- (二) 「なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ」(傍線部イ)を、主語を補って現代語訳せよ。
- (四) 「ただ同じさまにと」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (五) 「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ」(傍線部カ)の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。

第二 問

(二〇一五年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、平安後期の物語『夜の寝覚』の一節である。女君は、不本意にも男君（大納言）と一夜の契りを結んで懐妊したが、男君は女君の素性を誤解したまま、女君の姉（大納言の上）と結婚してしまった。その後、女君は出産し、妹が夫の子を生んだことを知った姉との間に深刻な溝が生じてしまう。いたたまれなくなった女君は、広沢の地（平安京の西で、嵐山にも近い）に隠棲する父入道のもとに身を寄せ、何とか連絡を取ろうとする男君をかたくなに拒絶し、ひっそりと暮らしている。以下を読んで、後の設問に答えよ。

さすがに姨捨山の月は、夜更くるままに澄みまさを、めづらしく、つくづく見いだしたまひて、ながめいりたまふ。

ありしにもあらずうき世にすむ月の影こそ見しにかはらざれけれ

そのままに手ふれたまはざりける箏の琴ひきよせたまひて、かき鳴らしたまふに、所からあはれまさり、松風もいと吹きあはせたるに、そそのかされて、ものあはれに思さるるままに、聞く人あらじと思せば心やすく、手のかぎり弾きたまひたるに、入道殿の、仏の御前におはしけるに、聞きたまひて、「あはれに、言ふにもあまる御琴の音かな」と、うつくしきに、聞きあまりて、行ひさしてわたりたまひたれば、弾きやみたまひぬるを、「なほあそばせ。念仏しはべるに、『極楽の迎へちかきか』と、心ときめきせられて、たづねまうで来つるぞや」とて、少将に和琴たまはせ、琴かき合はせなどしたまひて遊びたまふ程に、はかなく夜もあけぬ。かやうに心なぐさめつつ、あかし暮らしたまふ。

つねよりも時雨あかしたるつとめて、大納言殿より、

つられれと思ひやるかな山里の夜半のしぐれの音はいかにと

雪かき暮らしたる日、思ひいでなきふるさとの空さへ、とどたる心地して、さすがに心ぼそければ、端ちかくるぎりいでて、白

き御衣^ぞどもあまた、なかなかい^エろいろならむよりもをかしく、なつかしげに着なしたまひて、ながめ暮らしたまふ。ひととせ、かやうなりしに、大納言の上と端ちかくて、雪山つくらせて見しほどなど、思しいづるに、つねよりも落つる涙を、らうたげに拭^{ぬぐ}ひかくして、

「思ひいではあらしの山になぐさまで雪^オふるさとはなほぞこひしき

我をば、かくも思しいでじかし」と、推^おしはかりごとにさへ止^{とど}めがたきを、対^{たい}の君いと心ぐるしく見たてまつりて、「くるしく、いままでながめさせたまふかな。御前に人々参りたまへ」など、よろづ思ひいれず顔^キにもてなし、なぐさめたてまつる。

〔注〕 ○姨捨山——俗世を離れた広沢の地を、月の名所である長野県の姨捨山にたとえた表現。「我が心なぐさめかねつ更^{さら}級や

姨捨山に照る月を見て」（古今和歌集）を踏まえる。

○そのままに——久しく、そのままで。

○少将——女君の乳母の娘。

○対の君——女君の母親代わりの女性。

設 問

- (一) 傍線部ア・イ・カを現代語訳せよ。
- (二) 「つらけれど思ひやるかな」(傍線部ウ)を、必要な言葉を補って現代語訳せよ。
- (三) 「なかなかいろいろならむよりもをかしく」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「雪ふるさとはなほぞこひしき」(傍線部オ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (五) 「よろづ思ひいれず顔にもてなし」(傍線部キ)とは対の君のどのような態度か、説明せよ。

第二 問

(二〇一四年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、井原西鶴の『世間胸算用』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

分限ぶんげんになりける者は、その生まれつき格別なり。ある人の息子むすこ、九歳より十二の歳の暮れまで、手習てならひにつかはしけるに、その間の筆あひだの軸ちくを集め、そのほか人の捨てたるをも取りためて、ほどなく十二の春、我が手細工てさいくにして軸簾ちくすだれをこしらへ、一つを一匁もんめ五分づつの、三つまで売り払ひ、はじめて銀四匁五分まうけしこと、我が子ながらただものにあらざと、親の身にしては嬉うれしさのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊、このことをよしとは誉ほめたまはず。「我われ、この年まで、数百人子供を預かりて、指南しなんいたして見およびしに、その方ほうの一子いつしのごとく、氣アのはたらし過ぎたる子供の、末に分限に世を暮らしたためしなし。また、乞食こじきするほどの身代しんだいにもならぬもの、中分ちうぶんより下の渡世とせをするものなり。かかることには、さまざまの子細あることなり。そなたの子ばかりを、かしこきやうに思おもしめすな。それよりは、手イまはしのかしこき子供あり。我が当番の日はいふにおよばず、人の番の日も、箒ほうき取りどり座敷掃はきて、あまたの子供が毎日つかひ捨てたる反古ほんこのまろめたるを、一枚一枚皺しわのぼして、日ごとひごとに屏風屋びやうぶやへ売りて帰るもあり。これは、筆の軸を簾の思ひつきよりは、当分たうぶんの用に立つことながら、これもよろしからず。またある子は、紙の余慶持ち来たりて、紙つかひ過ウごして不自由なる子供に、一日一倍ましの利にてこれを貸し、年中に積もりての徳、何ほどといふ限りもなし。これらは皆、それぞれの親のせちがしこき氣を見習ひ、自然と出るおのれおのれが知恵にはあらず。その中にもひとりの子は、父母の朝夕てうせき仰せられしは、『ほかのことなく、手習を精に入れよ。成人してのその身のためになること』との言葉、反古エにはなりがたしと、明け暮れ読み書きに油断なく、後には兄弟子あにでしどもにすぐれて能書になりぬ。この心オからは、ゆくすゑ分限になる所見えたり。その子細は、一筋ひとすぢに家業かせぐ故ゆゑなり。惣そうじて親よりし続きたる家職のほか、商売を替へてし続きたるはまれなり。手習子てならひこどもも、おのれが役目の手を書くことはほかになし、若年じやくねんの時よりすすどく、無用の欲心

なり。それゆゑ、第一の、手は書かざることのあさまし。その子なれども、さやうの心入れ、よき事とはいひがたし。とかく少年の時は、花をむしり、紙烏いをのぼし、知恵付時ちゑづきときに身を持ちかためたるこそ、世の常なれ。七十になる者の申せしこと、ゆくすゑを見給へ」と言ひ置かれし。

〔注〕 ○分限——裕福なこと。金持ち。

○一匁五分——一匁は約三・七五グラム。五分はその半分。ここは銀貨の重さを表している。

○屏風屋へ売りて——屏風の下張り用の紙として売る。

○当分の用に立つ——すぐに役に立つ。

○紙の余慶——余分の紙。

○すすどく——鋭く抜け目がなく。

○紙烏——たこ 凧。

設問

- (一) 傍線部ア・エ・カを現代語訳せよ。
- (二) 「手まはしのかしこき子供」(傍線部イ)とは、どのような子供の事か。
- (三) 手習の師匠は、「これらは皆、それぞれの親のせちがしこき気を見習ひ、自然と出るおのれおのれが知恵にはあらず」(傍線部ウ)と言っているが、これは軸簾を思いついた子の父親のどのような考えを戒めたものか。
- (四) 手習の師匠が、手習に専念した子供について、「この心からは、ゆくすゑ分限になる所見えたり」(傍線部オ)と評したのはなぜか。
- (五) 「とにかく少年の時は、花をむしり、紙烏をのぼし、知恵付時に身を持ちかためたるこそ、道の常なれ」(傍線部キ)という手習の師匠の言葉の要点を簡約にのべよ。

第二 問

(二〇一三年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、近世に成立した平仮名本『吾妻鏡』の一節である。源平の合戦の後、源頼朝（二位殿）は、異母弟の義経（九郎殿）に謀反の疑いを掛け、討伐の命を出す。義経は、郎党や愛妾の静御前を引き連れて各地を転々としたが、静とは大和国吉野で別れる。その後、静は捕らえられ、鎌倉に送られる。義経の行方も分からないまま、文治二年（一一八六）四月八日、鎌倉・鶴岡八幡宮に参詣した頼朝とその妻・北条政子（御台所）は、歌舞の名手であった静に神前で舞を披露するよう求める。静は再三固辞したが、遂に扇を手にとって舞い始める。以下を読んで、後の設問に答えよ。

静、まづ歌を吟じていはく、

吉野山みねのしら雪踏み分けて入りにし人の跡ぞこひしき

また別に曲を歌うて後、和歌を吟ず。その歌に、

しづやしづしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

かやうに歌ひしかば、社壇も鳴り動くばかりに、上下いづれも興をもよほしけるところに、二位殿のたまふは、「今、八幡の宝前にて我が芸をいたすに、もつとも関東の万歳を祝ふべきに、人の聞きをもはばからず、反逆の義経を慕ひ、別の曲を歌ふ事、はなはだもつて奇怪なり」とて、御氣色かはらせ給へば、御台所はきこしめし、「あまりに御怒りをうつさせ給ふな。我が身において思ひあたる事あり。君すでに流人とならせ給ひて、伊豆の国におはししところ、われらと御ちぎりあさからずといへども、平家繁昌の折ふしなれば、父北条殿も、さすが時をおそれ給ひて、ひそかにこれを、とどめ給ふ。しかれどもなほ君に心をかよはして、くらき夜すがら降る雨をだにいとはず、かかぐる裳裾も露ばかりの隙より、君のおはします御閨のうちにしのび入り候ひしが、その後君は石橋山の戦場におもむかせ給ふ時、ひとり伊豆の山にのこりて、御命いかがあらんことを思ひくらせ

ば、日になに程か、夜にいく度か、たましひを消し候ひし。そのなげきにくらべ候へば、今の静が心もさぞあるらむと思はれ、いたはしく候ふ。かれもし多年九郎殿に相なれしよしみをわすれ候ふ程ならば、貞女のころざしにてあるべからず。今の静が歌の体、外には露ばかりの思ひをよせて、内には霧ふかき憤りをふくむ。もつとも御あはれみありて、まげて御賞翫候へ」と、のたまへば、二位殿きこしめされ、ともに御涙をもよほしたる有様にて、御腹立をやめられける。しばらくして、簾中より卯の花がさねの御衣を静にこそは下されけれ。

〔注〕 ○吉野山——「み吉野の山のしら雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ」（古今和歌集）を本歌とする。

○しづやしづ——「いにしへのしづのをだまき繰返し昔を今になすよしもがな」（伊勢物語）を本歌とする。「しづ（倭文）」は古代の織物の一種で、ここでは静の名を掛ける。「をだまき（苧環）」は、紡いだ麻糸を中を空洞にして玉状に巻いたもの。

○社壇——神を祭つてある建物。社殿。

○怒りをうつす——怒りの感情を顔に出す。

○流人——平治の乱の後、頼朝の父義朝は処刑、頼朝は十四歳で伊豆国に配流された。

○石橋山——神奈川県小田原市。治承四年（一一八〇）の石橋山の合戦の地。頼朝は平家方に大敗する。

○伊豆の山——静岡県熱海市の伊豆山神社。流人であった頼朝と政子の逢瀬の場。

○卯の花がさね——かさね襲の色目の名。表は白で、裏は青。初夏（四月）に着用する。

設 問

(一) 傍線部ア・エ・オを現代語訳せよ。

(二) 「御気色かはらせ給へば」(傍線部イ)とあるが、なぜそうなったのか、説明せよ。

(三) 「ひそかにこれを、とどめ給ふ」(傍線部ウ)とあるが、具体的には何をとどめたのか、説明せよ。

(四) 「貞女のこころざし」(傍線部カ)とは、ここではどのような心のさまをいうのか、説明せよ。

(五) 「御腹立をやめられける」(傍線部キ)とあるが、政子の話のどのような所に心が動かされたのか、説明せよ。

第二 問

(二〇一二年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、『俊頼髓脳』の一節で、冒頭の「岩橋の」^{いははし}という和歌についての解説である。これを読んで、後の設問に答えよ。

岩橋^{いははし}の夜の契^{ちぎ}りも絶えぬべし明くるわびしき葛城^{かつらぎ}の神

この歌は、葛城の山、吉野山とのほさまの、はるかなる程をめぐれば、事のわづらひのあれば、役^{えき}の行者^{ぎやうじや}といへる修行者の、この山の峰よりかの吉野山の峰に橋を渡したらば、事のわづらひなく人は通ひなむとて、その所におはする一言主^{ひとひとぬし}と申す神に祈り申しけるやうは、「神の神通^{じんづう}は、仏に劣ることなし。凡夫^{いほんぶ}のえせぬ事をするを、神力^{じりき}とせり。願はくは、この葛城の山のいただきより、かの吉野山のいただきまで、岩をもちて橋を渡し給へ。この願ひをかたじけなくも受け給はば、たふるにしたがひて法施^{ほふせ}をたてまつらむ」と申しければ、空^{そら}に声ありて、「我この事を受けつ。あひかまへて渡すべし。ただし、我がかたち醜^{みにく}くして、見る人おぢ恐^{おそ}りをなす。夜な夜な渡さむ」とのたまへり。「願はくは、すみやかに渡し給へ」とて、心経^{しんぎやう}をよみて祈り申ししに、その夜のうちに少し渡して、昼渡さず。役の行者それを見ておほきに怒^{いか}りて、「しからば護法^{ごほふ}、この神を縛^{しば}り給へ」と申す。護法たちまちに、葛^{かつら}をもちて神を縛りつ。その神はおほきなる巖^{いはほ}にて見え給へば、葛のまつはれて、掛け袋などに物を入れたるやうに、ひまはざまもなくまつはれて、今におはすなり。

〔注〕 ○葛城の山——大阪府と奈良県との境にある金剛山。

○吉野山——奈良県中部の山系。

○役の行者——奈良時代の山岳呪術者。葛城山に住んで修行し、吉野の金峰山・大峰などを開いた。

○一言主と申す神——葛城山に住む女神。

○法施——仏や神などに対し経を読み法文を唱えること。

○心経——般若心経

○護法——仏法守護のために使役される鬼神。

○掛け袋——紐をつけて首に掛ける袋。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「我がかたち醜くして、見る人おぢ恐りをなす」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「その夜のうちに少し渡して、昼渡さず」(傍線部オ)とあるが、一言主の神はなぜそのようにしたのか、説明せよ。

(四) 「ひまはざまもなくまつはれて、今におはすなり」(傍線部カ)とあるが、どのような状況を示しているのか、主語を補って簡潔に説明せよ。

(五) 冒頭の和歌は、ある女房が詠んだものだが、この和歌は、通ってきた男性に対して、どういうことを告げようとしているか、わかりやすく説明せよ。

第二 問

(二〇一一年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は『十訓抄』第六「忠直を存すべき事」の序文の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

孔子のたまへることあり、「ひとへに君に随^{したが}ひ奉る、忠にあらず。ひとへに親に随^アふ、孝にあらず。あらずべき時あらず。あらずべき時随^アふ、これを忠とす、これを孝とす」。

しかれば、主君にてもあれ、父母、親類にてもあれ、知音、朋友にてもあれ、悪しからむことをば、必ずいさむべきと思へども、世の末にこのことかなはず。人の習ひにて、思ひ立ちぬることをいさむるは、心づきなくて、言ひあはする人の、心になふやうにもおぼゆれば、天道はあはれとも思すらめども、主人の悪しきことをいさむるものは、顧み^{かうむ}を蒙ること、ありがたし。さて、することの悪しきさまにもなりて、しづかに思ひ出づる時は、その人のよく言ひつるものをと思ひあはすれども、また心の引くかたにつきて、思ひたることのある時は、むつかしく、またいさめずらむとて、このことを聞かせじと思ふなり。これはいみじく愚かなることなれども、みな人の習ひなれば、腹黒^{こは}からず、また心づきなからぬほどにはからふべきなり。

すべて、人の腹立ちたる時、強^{こは}く制すればよいと怒る。さかりなる火に少水をかけむは、その益なかるべし。しかれば、機嫌をはばかりて、やはらかにいさむべし。君もし愚かなりとも、賢臣あひ助けば、その国乱るべからず。親もしおごりとも、孝子つつしんで随はば、その家全くあるべし。重き物なれども、船に乗せつれば、沈まざるがごとし。上下はかはれども、ほどほどにつけて、頼^きめらむ人のためには、ゆめゆめうしろめたなく、腹黒^{こは}き心のあるまじきなり。陰^{かげ}にては、また冥加^{みょうが}を思ふべきゆゑなり。

〔注〕○冥加——神仏が人知れず加護を与えること。

設問

- (一) 傍線部ア・ウ・カを現代語訳せよ。
- (二) 「世の末にこのことかなはず」(傍線部イ)を「このこと」の内容がよくわかるように現代語訳せよ。
- (三) 「その人のよく言ひつるもの」と思ひあはすれども」(傍線部エ)を、内容がよくわかるように言葉を補って現代語訳せよ。
- (四) 「このことを聞かせじと思ふなり」(傍線部オ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (五) 「頼めらむ人のためには、ゆめゆめうしろめたなく、腹黒き心のあるまじきなり」(傍線部キ)とは、どういいうことが説明せよ。

第二 問

(二〇一〇年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

白河院の御時、天下殺生禁断せられければ、国土に魚鳥のたぐひ絶えにけり。そのころ、貧しかりける僧の、年老いたる母を持ちたるありけり。その母、魚なければ物を食はざりけり。たまたま求め得たる食ひ物も食はずして、やや日数ふるままに、老いの力いよいよ弱りて、今は頼むかたなく見えけり。

僧、悲しみの心深くして、尋ね求むれども得がたし。思ひあまりて、つやつや魚捕る術も知らねども、みづから川の辺にのぞみて、衣に玉襪たまたすきして、魚をうかがひて、はえといふ小さき魚を一つ、二つ捕りて持ちたりけり。禁制重きころなりければ、官人見あひて、からめ捕りて、院の御所へあて参りぬ。

まづ子細を問はる。「殺生禁制、世に隠れなし。いかでかそのよしを知らざらん。いはんや、法師のかたちとして、その衣を着ながらこの犯しをなすこと、ひとかたならぬ科とが、逃るるところなし」と仰せ含めらるるに、僧、涙を流して申すやう、「天下にこの制重きこと、皆うけたまはるところなり。たとひ制なくとも、法師の身にてこの振る舞ひ、さらにあるべきにあらず。ただし、我、年老いたる母を持てり。ただ我一人のほか、頼める者なし。齢よほひたけ身衰へて、朝夕の食ひ物たやすからず。我また家貧しく財持たねば、心のごとくに養ふに力堪へず。中にも、魚なければ物を食はず。このごろ、天下の制によりて、魚鳥のたぐひ、いよいよ得がたきによりて、身の力すでに弱りたり。これを助けんために、心のおきどころなくて、魚捕る術も知らざれども、思ひのあまりに川の端にのぞめり。罪をおこなはれんこと、案のうちにはべり。ただし、この捕るところの魚、今は放つとも生きがたし。身のいとまを聴ゆりがたくは、この魚を母のもとへ遣はして、今一度あざやかなる味を進めて、心やすくうけたまはりおきて、いかにもまかりならん」と申す。これを聞く人々、涙を流さずといふことなし。

院聞こしめして、孝養^{けつやう}の志あさからぬをあはれみ感ぜさせたまひて、さまさまの物どもを馬車に積みて賜はせて、許されにけり。乏^{ども}しきことあらば、かさねて申すべきよしをぞ仰せられける。

（『古今著聞集』）

〔注〕○白河院——白河上皇（一〇五三～一一二九）。讓位後、堀河・鳥羽天皇の二代にわたり院政を行う。

○殺生禁斷——仏教の五戒の一つである不殺生戒を徹底するため、法令で漁や狩りを禁止すること。

○はえ——コイ科の淡水魚。

設問

（一）傍線部エ・オ・カを現代語訳せよ。

（二）「頼むかたなく見えけり」（傍線部オ）とあるが、どういうことか説明せよ。

（三）「いかでかそのよしを知らざらん」（傍線部イ）を、「そのよし」の内容がわかるように現代語訳せよ。

（四）「ひとかたならぬ科」（傍線部ウ）とは、どういうことか説明せよ。

（五）「心やすくうけたまはりおきて、いかにもまかりならん」（傍線部キ）を、内容がよくわかるように現代語訳せよ。

第二 問

(二〇〇九年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、左大将邸で催された饗宴^{きやうえん}で、源仲頼(少将)が、左大将の愛娘^{まなむすめ}、あて宮(九の君)をかいま見た場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

かくて、いとおもしろく遊び^アののしる。仲頼、屏風^{びやうぶ}ふたつがはさまより、御簾^{みす}のうちを見入るれば、母屋^{もや}の東面^{ひむがしおもて}に、こなたかなたの君たち、数を尽くしておはしまさふ。いづれとなく、あたりさへ輝くやうに見ゆるに、魂^{たましひ}も消え惑ひてものおぼえず、あやしくきよなる顔かたちかなと、ここちそらなり。なほ見れば、あるよりもいみじくめでたく、あたり光り輝くやうなる中に、天女くだりたるやうなる人あり。仲頼、これはこの世の中に名立^{なだ}たる九の君なるべし、と思ひよりて見るに、せむ方なし。限りなくめでたく見えし君たち、このいま見ゆるにあはすれば、こよなく見ゆ。仲頼、いかにせむと思ひ惑ふに、今宮ともろにも母宮の御方へおはする御うしろで、姿つき、たとへむ方なし。火影^{ほかげ}にさへこれはかく見ゆるぞ。少将思ふにねたきこと限りなし。われ何せむにこの御簾^ウのうちを見つらむ。かかる人を見て、ただにてやみなむや。いかさまにせむ。生けるにも死ぬるにもあらぬこちして、例の遊び、はたまして心に入れてしるたり。夜ふけて、上達部^{かむだちめ}、親王^{みこ}たちもものかづき給ひて、いちの舎人^{とねり}までもものかづき、禄^{ろく}などしてみな立ち給ひぬ。

仲頼、帰るそらもなく、家に帰りて五六日、かしらもまたげで思ひふせるに、いとせむ方なくわびしきこと限りなし。になくめでたしと思ひし妻^めも、ものともおぼえず、かたときも見ねば恋ひしく悲しく思ひしも、前に向かひるたれども、目にも立たず。身のならむことも、すべて何ごととも何ごととも、よろづのこと、さらに思ほえであるときに、「などか常に似ず。まめだちける御けしきなる」といふ。少将、「御ためにはかくまめにこそ。あだなれとやおぼす」などいふけしき、常に似ぬときに、女、「いでや、

あだごとはあだにぞ聞きし松山や目に見す見すも越ゆる波かな」

といふときに、少将思ひ乱るる心にも、なほあはれにおぼえければ、

「浦風の藻を吹きかくる松山もあだし波こそ名をば立つらし

あがほとけ」といひて泣くをも、われによりて泣くにはあらずと思ひて、親の方へ往ぬ。

(『うつほ物語』)

〔注〕 ○こなたかなたの君たち——左大将家の女君たち。

○今宮——仁寿殿の女御（あて宮の姉）腹の皇女。左大将の孫にあたる。

○母宮——あて宮の母。

○あだごとはあだにぞ聞きし——あなたの浮気心は、いい加減な噂と聞いていました。

○松山——陸奥国の歌枕。本文の二首の歌は、ともに、『古今和歌集』の「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ（もし、あなた以外の人に、私が浮気心を持ったとしたら、あの末の松山を波も越えてしまうでしょう。そんなことは決してありません）」を踏まえる。

○あだし波こそ名をば立つらし——いい加減な波が、根も葉もない評判を立てているようです。

設 問

- (一) 傍線部ア・ウ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「こよなく見ゆ」(傍線部イ)について、必要な言葉を補って現代語訳せよ。
- (三) 「かしらももたげで思ひふせる」(傍線部エ)とあるが、どのような様子を述べたものか説明せよ。
- (四) 「思ひ乱るる心にも、なほあはれにおぼえければ」(傍線部カ)を、状況がわかるように現代語訳せよ。
- (五) 「われによりて泣くにはあらずと思ひて」(傍線部キ)を、必要な言葉を補って現代語訳せよ。

第二 問

(二〇〇八年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、たよりなかりける女の、清水きよみづにあながちに参るありけり。参りたる年月積りたりけれど、つゆばかりその験しるしとおぼゆることなく、いとどたよりなくなりまさりて、果ては、年来としよりありけるところをも、そのこととなくあくがれて、寄りつく所もなかりけるままには、泣く泣く観音を恨みたてまつりて、「いみじき前の世さきの報いなりといふとも、ただ少しのたより賜たまはり候はん」といりもみ申して、御前まへにうつぶしたりける夜の夢に、「御前より」とて、「かくあながちに申すは、いとほしくおぼしめせど、少しにても、あるべきたよりのなければ、その事をおぼしめし嘆くなり。これを賜はれ」とて、御帳みちやうの帷かたばらをいよくうちたたみて、前に打ち置かると見て、夢さめて、御燈明みあかしの光に見れば、夢に賜はると見づる御帳の帷、ただ見づるさまにたたまれてあるを見るに、「さは、これよりほかに、賜たまふべき物なきにこそあんなれ」と思ふに、身のほど思ひ知られて、悲しくて申すやう、「これ、さらに賜はらじ。少しのたよりも候はば、錦にしきをも、御帳の帷には、縫ひてまゐらせんところと思ひ候ふに、この御帳ばかりを賜はりて、まかり出つべきやう候はず。返しまゐらせ候ひなん」と口説くどき申して、犬防いぬふせぎの内にさし入れて置きつ。さて、またまどろみ入いりたるに、また夢に、「など、さかしうはあるぞ。ただ賜たまはん物をば賜はらで、かく返しまゐらすは、あやしき事なり」とて、また賜はると見る。さて、醒さめたるに、また同じやうに、なほ前にあれば、泣く泣く、また返しまゐらせつ。かやうにしつつ、三度みたたび返したてまつるに、三度ながら返し賜びて、はての度は、この度返したてまつらば、無礼むらいなるべきよしを戒められければ、「かかりとも知らざらん僧は、御帳の帷を放ちたるとや疑はんずらん」と思ふも苦しければ、まだ夜深よふかく、懷にさし入れて、まかり出でにけり。「これをば、如何いかにすべきならん」と思ひて、引き広げて見て、「着るべき衣きぬもなし。さは、これを衣にして着ん」と思ふ心つきぬ。それを衣や袴はかまにして着てける後、見と見る男にまれ、女にまれ、あはれにいとほしきものに思はれて、すず

ろなる人の手より物を多く得てけり。大事なる人の愁^{うれ}へをも、その衣を着て、知らぬやんごとなき所にも、まゐりて申させければ、かならず成りけり。かやうにしつつ、人の手より物を得、よき男にも思はれて、樂^キしくてぞありける。さればその衣をば収めて、かならずせんと思ふ事の折りにぞ、取り出でて着てける。かならず叶^{かな}ひけり。

(『古本説話集』)

〔注〕○清水——京都の清水寺。本尊は十一面観音。

○いりもみ申して——執^{しつ}拗^{よう}にお願い申し上げて。

○御帳の帷——本尊を納めた厨^{ずし}子の前に隔てとして垂らす絹製の布。

○犬防ぎ——仏堂の内陣と外陣を仕切る低い格子のついたて。

○人の愁へ——訴訟。

設問

(一) 傍線部ア・ウ・エを現代語訳せよ。

(二) 「身のほど思ひ知られて」(傍線部イ)を、「身のほど」の内容がわかるように現代語訳せよ。

(三) 「かかりとも知らざらん僧」(傍線部オ)を、「かかり」の内容がわかるように現代語訳せよ。

(四) 「かならず成りけり」(傍線部カ)とあるが、何がどうであったというのか、簡潔に説明せよ。

(五) 「楽しくてぞありける」(傍線部キ)とあるが、「楽しくて」とはどのような状態のことか、簡潔に説明せよ。

第二 問

(二〇〇七年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、堀河院をめぐる二つの説話である。これを読んで後の設問に答えよ。

堀河院は、末代の賢王なり。なかにも、天下の雑務を、ことに御意に入れさせ給ひたりけり。職事の奏したる申し文をみな召し取りて、御夜居に、文こまかに御覧じて、所々に挿み紙をして、「このこと尋ぬべし」、「このこと重ねて問ふべし」など、御手づから書きつけて、次の日、職事の参りたるに賜はせけり。一遍こまかに聞こしめすことだにありがたきに、重ねて御覧じて、さまでの御沙汰ありけん、いとやんごとなきことなり。すべて、人の公事つとむるほどなどをも、御意に入れて御覧じ定めけるにや、追儼の出仕に故障申したる公卿、元三の小朝拝に参りたるをば、ことごとく追ひ入れられけり。「去夜まで所労あらんものの、いかでか一夜のうちになほるべき。いつはれることなり」と仰せられけり。白河院はこれを聞こしめして、「聞くとも聞かじ」とぞ仰せられける。あまりのことなりと思しめしけるにや。

堀河院、位の御時、坊門左大弁為隆、職事にて、大神宮の訴へを申し入れけるに、主上御笛を吹かせ給ひて、御返事もなかりければ、為隆、白河院に参りて、「内裏には御物の氣おこらせおはしましたり。御祈りはじまるべし」と申しけり。院おどろかせ給ひて、内侍に問はせ給ひければ、「さること、夢にも侍らず」と申しけり。あやしみて為隆に御尋ねありければ、「そのことに侍り。一日、大神宮の訴へを奏聞し侍りしに、御笛をあそばして勅答なかりき。これ御物の氣などにあらずは、あるべきことにあらざと思ひて、申し侍りしなり」と申しければ、院より内裏へそのよし申させ給ひけり。御返事には、「さること侍りき。ただのことにはあらず。笛に秘曲を伝へて、その曲を千遍吹きし時、為隆参りてことを奏しき。今二、三遍になりたれば、吹き果てて言はんと思ひしほどに、尋ねしかば、まかり出でにき。それをさ申しける、いとはづかしきことなり」とぞ申させ給ひける。

(『続古事談』)

〔注〕

○堀河院——堀河天皇（一〇七九～一一〇七）。白河天皇の皇子。

○職事——蔵人。天皇に近侍し、政務にかかわる雑事をつとめる。

○公事——朝廷の儀式。

○追儼——大晦日の夜、悪鬼を追い払う宮中の行事。

○小朝拝——元日、公卿・殿上人が天皇に拝礼する儀式。

○白河院——白河上皇（一〇五三～一一二九）。堀河天皇に譲位した後も、政務に深くかかわった。

○為隆——藤原為隆（一〇七〇～一一三〇）。

○大神宮——伊勢神宮。

○内侍——天皇に近侍する女官。

設 問

- (一) 傍線部ア・ウを現代語訳せよ。
- (二) 「さまでの御沙汰ありけん」(傍線部イ)について、必要なことばを補って現代語訳せよ。
- (三) 「『聞くとも聞かじ』とぞ仰せられける」(傍線部エ)とあるが、ここには白河院の、だれに対する、どのような気持ちが表れているか、説明せよ。
- (四) 傍線部オ「さること」、傍線部カ「さること」は、それぞれ何を指すか、説明せよ。
- (五) 「尋ねしかば、まかり出でにき」(傍線部キ)を、だれの行為かがわかるように、ことばを補って現代語訳せよ。

第二 問

(二〇〇六年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、物語の一節である。「男」には、同居する「女」(もとからの妻)があつたが、よそに新しい妻をもうけた。その新しい妻を家に迎えることになり、「男」は「女」に、しばらくどこかに居てほしいと頼んだ。以下は、「女」が家を出て行く場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

「^{こよひ}今宵なむものへ渡らむと思ふに、車しばし」

となむ言ひやりたれば、男、「あはれ、いづちとか思ふらむ。行かむさまをだに見む」と思ひて、いまここへ忍びて来ぬ。
女、待つとて^{はし}端にあたり。月のあかきに、^ア泣くことかぎりなし。

我が身かくかけはなれむと思ひきや月だに宿をすみはつる世に
と言ひて泣くほどに来れば、さりげなくて、^イうちそばむきてゐたり。

「^ウ車は、牛たがひて、馬なむはべる」
と言へば、

「ただ近き所なれば、車は所せし。^(注)さらば、その馬にても。夜のふけぬさきに」

と急げば、いとあはれと思へど、かしこには皆、あしたにと思ひためれば、^エのがるべうもなければ、心ぐるしう思ひ思ひ、馬引き出ださせて、^{すのこ}簀子に寄せたれば、乗らむとて立ち出でたるを見れば、月のいとあかきかげに、ありさまいとささやかにて、髪はつややかにて、いとうつくしげにて、^{たけ}丈ばかりなり。

男、手づから乗せて、ここかしこひきつくろふに、^オいみじく心憂けれど、念じてものも言はず。馬に乗りたる姿、かしらつきいみじくをかしげなるを、あはれと思ひて、

「送り^カに我も参らむ」

と言ふ。

「ただ^キここもとなる所なれば、あへなむ。馬はただいま返したてまつらむ。そのほどはここにおはせ。見ぐるしき所なれば、人に見すべき所にもはべらず」

と言へば、「さもあらむ」と思ひて、とまりて、尻^{しり}うちかけてゐたり。

この人は、供に人多くはなくて、昔より見なれたる小舎人^{ことねりわらは}童ひとりを具して往^いぬ。男の見つるほどこそ隠して念じつれ、門^{かど}引き出づるより、いみじく泣きて行く。

（『堤中納言物語』）

〔注〕 ○かしこには——新しい妻のところでは。

設問

- (一) 傍線部イ・ウ・キを現代語訳せよ。
- (二) 「泣くことかぎりなし」（傍線部ア）とあるが、「女」の気持ちについて、和歌を参考にして簡潔に説明せよ。
- (三) 「心ぐるしう思ひ思ひ」（傍線部エ）について、だれの、どのような気持ちを言うのか、簡潔に説明せよ。
- (四) 「いみじく心憂けれど、念じてものも言はず」（傍線部オ）を、必要なことばを補って現代語訳せよ。
- (五) 「送りに我も参らむ」（傍線部カ）には、「男」のどういう気持ちがこめられているか、説明せよ。

第二 問

(二〇〇五年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、ある事情で身を隠して行方知れずになった姫君の一行（姫君・侍従・尼君）を、長谷寺の観音の霊夢に導かれた男君（中将）が、住吉社で捜しあてる場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

さらぬだにも、旅の空は悲しきに、夕波千鳥、あはれに鳴きわたり、岸の松風、ものさびしき空にたぐひて琴の音ほのかに聞こえけり。この声、律に調べて、盤渉調に澄みわたり、これを聞き給ひけん心、いへばおろかなり。「あな、ゆゆし。人のしわざには、よも」など思ひながら、その音に誘はれて、何となく立ち寄りて聞き給へば、釣殿の西面に、若き声、ひとり、ふたりが程、聞こえてけり。琴かき鳴らす人あり。「冬は、をさをさしくも侍りき。このごろは、松風、波の音もなつかしくぞ。都にては、かかる所も見ざりしものを。あはれあはれ、心ありし人々に見せまほしきよ」とうち語らひて、「秋の夕は常よりも、旅の空こそあはれなれ」など、をかしき声してうちながむるを、侍従に聞きなして、「あな、あさまし」と胸うち騒ぎて、「聞きなしにや」とて聞き給へば、

尋ぬべき人もなぎさの住の江にたれまつ風の絶えず吹くらん

と、うちながむるを聞けば、姫君なり。

「あな、ゆゆし。仏の御験は、あらたにこそ」とうれしくて、簀の子に立ち寄りて、うち叩けば、「いかなる人にや」とて、侍従、透垣の隙のぞけば、簀の子に寄り掛かり居給へる御姿、夜目にもしるしの見えければ、「あな、あさましや、少将殿のおはします。いかが申すべき」と言へば、姫君も、「あはれにも、おぼしたるにこそ。さりながら、人聞き見苦しかりなん。我はなしと聞こえよ」とあれば、侍従、出であひて、「いかに、あやしき所までおはしたるぞ。あな、ゆゆし。その後、姫君うしなひ奉りて、慰めがたさに、かくまで迷ひありき侍るになん。見奉るに、いよいよ古の恋しく」など言ひすさびて、あはれなるままに、

涙のかきくれて、物もおぼえぬに、中將も、いともよほすこちぞし給ふ。「侍従の、君のことをばしのび来しものを、うらめしくも、のたまふものかな」と、「御声まで聞きつるものを」とて、淨衣じやうえの御袖そでを顔に押しあて給ひて、「うれしさもつらさも、なかばにこそ」とのたまへば、侍従、ことわりにおぼえて、「さるにても、御休みさぶらへ。都のこともゆかしきに」とて、尼君に言ひあはすれば、「ありがたきことにこそ。たれもたれも、もののあはれを知り給へかし。まづ、これへ入らせ給ふべきよし、聞こえ奉れ」と言へば、侍従、「なれなれしく、なめげに侍れども、そのゆかりなる声に。旅キは、さのみこそさぶらへ。立ち入らせ給へ」とて、袖をひかへて入れけり。

(『住吉物語』)

〔注〕 ○律——邦樂の旋法の一つ。秋の調べとされる。

○盤涉調——律の調子の一種。

○をさをさし——ここでは「ろくになじめない」の意。

○少將殿——姫君たちは、この年の正月に、男君が少將から中將に昇進したことをまだ知らないため、こう呼んだ。

○淨衣——潔斎のために男君が着用していた白い装束。

○そのゆかりなる声に——「姫君のゆかりである私の声をお尋ね下さったのですから」の意。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・オを、必要な言葉を補って現代語訳せよ。
- (二) 傍線部ウについて、何を何と「聞きなし」たと思ったのか、簡潔に記せ。
- (三) 傍線部エの歌「尋ねべき人もなきさの住の江にたれまつ風の絶えず吹くらん」を、掛詞に注意して現代語訳せよ。
- (四) 傍線部カ「うれしさもつらさも、なかばにこそ」とあるが、なぜそのように感じたのか、簡潔に説明せよ。
- (五) 傍線部キについて、「さのみ」の「さ」の内容がわかるように言葉を補って現代語訳せよ。

第二 問

(二〇〇四年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、尾張藩名古屋城内に仕える女性が、七年ぶりに江戸の実家に帰る場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

こゆるぎの磯^{いそ}ちかき^{とまや}苦屋の内にも、雛^{ひな}遊びするをとめどもは、桃、山吹の花など、こちたきまで瓶^{かめ}にさし、けふの日の暮るるを惜しと思へるさまなり。野に出^いでてははこなど摘むもあるは、けふの餅^{もち}のためなるべし。

七とせのむかし、この所を過ぎけるは九月九日にて、別れ来し親はらからのことなど思ひ出でて悲しかりしに、けふは一二日のうちに逢^あひみんことを思へば、うれしきあまり、心さへときめきして、それとなくうち笑^イみがちなるを、かたへなる人らは、ものぐるほしきにやなども思ふらんよ。明日は府にまゐれば、公^{おほやけわたくし}私の用意ありとて、男のかぎり、みな戸塚の宿にといそぐまゝに、ひとりのどこにも行きがたくて、同じさまにやどりにつきぬ。

三日の夜より雨ふりいでて、つとめてもなほやまず。金川^{かながは}、河崎、品川^{うまやうまや}などいふ駅々もただ過ぎに過ぎきて、芝にまゐる。こより大路のさま、たかき^ウ賤^{いや}しき袖^{そで}をつらね、馬、車たてぬきに行きかひ、はえばえしく賑^{にぎ}はへるけしき、七とせのねぶり一ときにさめし心地して、うれしさいはんかたなし。その夜は御館^{みたち}にありて、三月五日といふに、ふるき家居にはかへりぬ。

いふかひなけれど、親族^{しぞく}のかぎり、近きはをば、いとこなど待ちあつまりて、とりどりに何事をいふも、まづおぼえず。をさなき妹のひとりありしも、いつかねびまさりて、髪などあげたれば、わが方には見わすれたるを、かれよりうち出でんもつつましくやありけん、をばの後ろにかくれて、なま恨めしと思へるけしきに見おこせたるまま、なほ心得ずして、「そこにもものし給^{たま}ふは、いづれよりの客人^{まろうと}にかおはす。ゆゆしげなることには侍^{はべ}れど、過ぎ^ク行き侍りし母のおもかげに、あさましきまで似かよひ給ふめるは」と問へば、かれはうつぶしになりて、つらももたげず。をばも鼻せまりてものいひやらす。みな「は」と笑ふにぞ、はじめて心づきぬ。

(『庚子道の記』)

〔注〕○こゆるぎの磯——神奈川県大磯町付近の海辺。歌枕。

○ははこ——ゴギョウのこと。まぜて草餅を作る。

○府——江戸。

○戸塚の宿——東海道五番目の宿場。日本橋より一日分の行程。

○金川・河崎・品川——それぞれ東海道三番目・二番目・一番目の宿場。

○芝——現東京都港区。飯倉神明宮・増上寺などがある。

○御館——尾張藩の江戸藩邸。

設問

(一) 傍線部ア・オ・カ・クを現代語訳せよ。

(二) 傍線部イについて、「うち笑みがち」なのはなぜか、簡潔に説明せよ。

(三) 傍線部ウは、どういう光景を述べたものか、簡潔に説明せよ。

(四) 傍線部エ「うれしさいはんかたなし」とあるが、なぜうれしいのか、簡潔に説明せよ。

(五) 傍線部キ「なほ心得ずして」とあるが、何を「心得」なかったのか、説明せよ。

第二 問

(二〇〇三年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、北国の山寺に一人籠もって修行する法師が、雪に閉じこめられ、飢えに苦しんで観音菩薩に救いを求めている場面から始まっている。これを読んで、後の設問に答えよ。

「なか助け給はざらん。高き位を求め、重き宝を求めばこそあらめ、ただ今日食べて、命生くばかりの物を求めて賜べ」と申すほどに、乾の隅の荒れたるに、狼に追はれたる鹿入り来て、倒れて死ぬ。ここにこの法師、「観音の賜びたるなんめり」と、「食ひやせまし」と思へども、「年ごろ仏を頼みて行ふこと、やうやう年積もりにたり。いかでかこれをはかに食はん。聞けば、生き物みな前の世の父母なり。われ物欲しといひながら、親の肉を屠りて食らはん。物の肉を食ふ人は、仏の種を絶ちて、地獄に入る道なり。よろづの鳥獣も、見ては逃げ走り、怖ぢ騒ぐ。菩薩も遠ざかり給ふべし」と思へども、この世の人の悲しきことは、後の罪もおぼえず、ただ今生きたるほどの堪へがたさに堪へかねて、刀を抜きて、左右の股の肉を切り取りて、鍋に入れて煮食ひつ。その味はひの甘きこと限りなし。

さて、物の欲しさも失せぬ。力も付きて人心地おぼゆ。「あさましきわざをもしつるかな」と思ひて、泣く泣くゐたるほどに、人々あまた来る音す。聞けば、「この寺に籠もりたりし聖はいかになり給ひにけん。人通ひたる跡もなし。参り物もあらじ。人氣なきは、もし死に給ひにけるか」と、ロ々に言ふ音す。「この肉を食ひたる跡をいかでひき隠さん」など思へど、すべき方なし。「まだ食ひ残して鍋にあるも見苦し」など思ふほどに、人々入り来ぬ。

「いかにしてか日ごろおはしつる」など、廻りを見れば、鍋に檜の切れを入れて煮食ひたり。「これは、食ひ物なしといひながら、木をいかなる人か食ふ」と言ひて、いみじくあはれがるに、人々仏を見奉れば、左右の股を新しく彫り取りたり。「これは、この聖の食ひたるなり」とて、「いとあさましきわざし給へる聖かな。同じ木を切り食ふものならば、柱をも割り食ひてんもの

を。など仏を損^そなひ給ひけん」と言ふ。驚きて、この聖見奉れば、人々言ふがごとし。「さは、ありつる鹿は仏の験^クじ給へるにこそありけれ」と思ひて、ありつるやうを人々に語れば、あはれがり悲しみあひたりけるほどに、法師、泣く泣く仏の御前に参りて申す。「もし仏のし給へることならば、もとの様にならせ給ひね」と返す返す申しければ、人々見る前に、もとの様になり満ちにけり。

(『古本説話集』)

〔注〕 ○仏の種を絶ちて——成仏する可能性を絶って。

○仏——ここでは観音菩薩像のこと。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・エ・オ・キを現代語訳せよ。
- (二) 傍線部ウおよびカの「あさましきわざ」は、それぞれのどのような内容を指すか、簡潔に記せ。
- (三) 傍線部クについて、具体的な内容がわかるように現代語訳せよ。

第二 問

(二〇〇二年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、千人の後をもつ大王が、一人の後（菩薩女御）に愛情を傾け、その后が懷妊したという話に続く場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

九百九十九人の后たち、第一より第七に当たる宮に集まり、いかがせんとぞ歎き合はせられける。ただこの王子の果報のほどを知らんとて、ある相人^{さうじん}を召して、この王子のことを問はれけり。「菩薩女御の孕^{はら}みたまへるは、王子か姫宮か。また果報^アのほどを相し申せ。不審におぼゆる」とありければ、相人、文書を開き申しけるは、「孕みたまへる御子は王子にておはしますが、御命は八千五百歳なり。国土安穩にして、この時、万民みな自在快樂^{けらく}の王者にあるべし」とぞ占ひ申しける。后たち相人に仰せられけるは、「この王子の御事をば、大王の御前にて我らが言ふままに相し申せ。禄^{ろく}は望みにしたがふべし。この王子は、生じたまひては七箇日といはば、九足八面の鬼となりて、身より火を出^いだし、都をはじめとして、一天をみな焼失すべし。この鬼は三色にして、身長は六十丈に倍すべし。大王食はれたまふべし」。また言はく、「鬼波国^{きばこく}より九十九億の鬼王来りて、大風起こし、大水出だして、一天をばみな海と成すべしと申せ」とて、おのおのの分々にしたがひて、禄を相人に賜ふ。あるいは金五百両、あるいは千両なり。しかのみならず、綾錦^{あやにしき}の類は莫大なり。相人は喜びて、「承りぬ」とて答へ申しける。后たちは、「あなかしこ、あなかしこ」とぞ口秘^ひしめしたまひける。相人、「いかでか違へたてまつるべき」と申し立つ。

中一日ありて、后たち、大王の御前に参りて、申し合はせられけるは、「後の御懷妊のこと、王子とも姫宮ともいぶかし。早く承らん。相人^ウを召して聞こしめすべし。余りにおぼゆるものかな」。時にしかるべしとおぼしめして、件^{くだん}の相人を召す。后たち、仰せられける菩薩女御の御産のことを、何の子ぞと申せと言ひながら、約束^エを違へんずらんと、おのおのの心内はひとへに鬼のごとし。相人は雑書^(注2)を開きて目録を見たてまつるに、王子の御果報めでたきこと申すに及ばず、この後の御年齢はいかばかりと

申すに、三百六十歳とおぼえたり。やがて相人は目録にまかせて見れば、涙もさらに留まらず。これほどめでたくおはします君を、あらぬ様に申さんことの心憂さよとは思へども、前の約束のごとく占ひ申しけり。大王はこのことを聞こしめし、「親となり、子となること、たまたまもありがたし。」^(注3)この世一つならぬこと。今日までに子といふ者いまだ見ず。いかなる鬼とも生まれ来らば来れ。親と子と知られ、一日も見て後にとにかくもならんことは苦しからじ」とて、御用ゐもなかりけり。

(『神道集』)

〔注〕 (1) この王子——これから生まれてくる子のこと。

(2) 雑書——運勢・吉凶などを記した書。

(3) この世一つならぬこと——この世だけではない、深い因縁があることなのだ。

設問

(一) 傍線部ア・イを現代語訳せよ。

(二) 傍線部ウ「相人を召して聞こしめすべし」について、何を「聞こしめす」というのか、内容がわかるように現代語訳せよ。

(三) 傍線部エ「約束」の内容を簡潔に記せ。

(四) 傍線部オ・カ・キを現代語訳せよ。

第二 問

(二〇〇一年・文科)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

かくて四条の大納言殿は、内うちの大おほ殿どのの上の御事のちの後のちは、よろづ倦うんじはて給ひて、つくづくと御おこなひにて過ぐさせ給ふ。法師と同じさまなる御有様なれど、「これ思おもへばあいなきことなり。一日ひとひにても出家の功德、世に勝すぐれめイでたかなるものを、今しアばしあらば、御匣みくしげ殿の御事など出いで来て、いとど見捨てがたく、わりなき御絆ほだしにこそおはせめ。さらば、このほどこそよきほどなれ」と思おもしとりて、人知れずさるべき文ふみども見したため、御庄みしやうの司つかさども召して、あるべき事どものたまはせなどして、なほ今年と思すに、女御おほみの、なほ人知れずあはれに心細く思されて、「人の心はいみじういふかひなきものにこそあれ。などておぼゆべからむ」と、いと我エながらもくちをしう思さるべし。何ごとかはあると思しまはしつつ、人知れず御心ひとつを思しまどはず、いみじうあはれなり。この御本意ほいありといふことは、女御殿も知らせ給へれど、いつといふことは知らせ給はず。

かかるほどに、椎しひを人の持てまゐりたれば、女御殿の御方へ奉らせ給ひける。御箱ふたの蓋ふたを返し奉らせ給ふとて、女御殿、カありながら別れむよりはなかなかなくなりたるこの身とものがな

と聞こえ給ひければ、大納言殿の御返し、

奥山の椎もとが本もとをし尋ね来こばとまるこの身を知らざらめやは

女御殿、いとあはれと思さる。

(『栄花物語』)

第二 問

(二〇〇一年・理科)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

九条民部卿あきより頼のもとに、あるなま公達きんだち、年は高くて、近衛司このゑづかさを心がけ給ひて、ある者して、「よきさまに奏し給へ」など言ひ、入れ給へるを、主あるじうち聞きて、「年は高く、今はあるらむ。なんでふ、近衛司望ままるるやらむ。出家うちして、かたかたに居給ひたれかし」とうちつぶやきながら、「細かに承りぬ。ついで侍るに、奏し侍るべし。このほど、いたはることありてなむ。かくて聞き侍る、いと便びんなく侍りと聞こえよ」とあるを、この侍さむらい、さし出づるままに、「申せと候ふ。年高くなり給ひぬらむ。なんでふ、近衛司望み給ふ。かたかたに出家うちして、居給ひたれかし。さりながら、細かに承りぬ。ついで侍るに奏すべしと候ふ」と言ふ。

この人、「しかしかさま侍り。思ひ知らぬにはなけれども、前世しゆくしふの宿執ウにや、このことさがたく心にかかり侍れば、本意ほんい遂とげてのちは、やがて出家して、籠こもり侍るべきなり。隔てなく仰せ給ふ、いとど本意に侍り」とあるを、そのままにまた聞こゆ。主、手をはたと打ち、「いかに聞こえつるぞ」と言へば、「しかしか、仰せのままになむ」といふに、すべていふはかりなし。

この使つかひにて、「いかなる国王、大臣の御事をも、内々おろかなる心の及ぶところ、さこそうち申すことなれ。それを、この不覺オ人、ことごとくに申し侍りける。あさましと聞こゆるもおろかに侍り。すみやかに参りて、御所望のこと申して、聞かせ奉らむ」とて、そののち少将になり給ひにけり。まことに、言はれけるやうに、出家していまそかりける。

(『十訓抄』)

〔注〕 ○九条民部卿顕頼——藤原顕頼（一〇九四～一一四八）。

○近衛司——近衛府の武官。長官は大将、次官は中将・少将。

○かたかたに——片隅に。

○しかしかさま侍り——おっしゃる通りです。

設 問

（一） 傍線部ア・イ・エ・カを現代語訳せよ。

（二） 傍線部ウを、具体的な内容がよくわかるように現代語訳せよ。

（三） 傍線部オについて、顕頼がこの侍を「不覚人」と呼んだのはどういう理由からか、簡潔に説明せよ。

第二 問

(二〇〇〇年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、唐土へ出立する息子成尋阿闍梨を思う母のものである。作者は成尋のもとにいたが、門出の直前にそこから仁和寺へと移された。そのことを嘆き、作者は成尋に別れを悲しむ歌を送った。その翌朝、成尋から手紙をもらったところから、この文章は始まる。結局成尋は、母に会わずに出発してしまった。これを読んで、後の設問に答えよ。

その朝、文おこせ給へる。つらけれど急ぎ見れば、「夜のほど何事か。昨日の御文見て、よもすがら涙もとまらず侍りつる」とあり。見るに、文字もたしかに見えず。涙のひまもなく過ぎ暮らす。

からうじて起き上がりて見れば、仁和寺の前に、梅の木にこぼるるばかり咲きたり。居る所など、みなし置かれたり。心もなきやうにて、いづ方西なども覚えず。目も霧りわたり、夢の心地して暮らしたるまたの朝、京より人来て、「今宵の夜中ばかり出で給ひぬ」と言ふ。起き上がられで、言はん方なく悲し。

またの朝に文あり。目も見あけられねど、見れば、「参らんと思ひ侍れど、夜中ばかりに詣で来つれば、返す返す静心なく」とあり。目もくれて心地も惑ふやうなるに、送りの人々集まりて慰むるに、ゆゆしう覚ゆ。「やがて八幡と申す所にて船に乗り給ひぬ」と聞くにも、おぼつかなさ言ふ方なき。

船出する淀の御神も浅からぬ心を汲みて守りやらなむと泣く泣く覚ゆる。

「あさましう、見じと思ひ給ひける心かな。あさましう」と、心憂きことのみ思ひ過ぐししかば、また「この人のまことにせんと思ひ給はんことたがへじ」など思ひしことの、阿闍梨に従ひて、かかることもいみじげに泣き妨げずなりにし、この日ごろの過ぐるままにくやしく、「手を控へても、居てぞあるべかりける」とくやしく、涙のみ目に満ちて物も見えねば、

しひて行くふなぢ船路を惜しむ別れ路に涙もえこそとどめざりけれ

（『成尋阿闍梨母集』）

〔注〕○八幡——京都府南西部の地名。淀川に面し、石清水いわしみず（男山おとこやま）八幡宮はちまんぐうがある。

設問

- (一) 傍線部ア・ウ・エ・オを、わかりやすく現代語訳せよ。
- (二) 傍線部イを、事情がよくわかるように現代語訳せよ。
- (三) 傍線部カはどのような作者の心情を述べたものか、説明せよ。

第三 問

(一九九九年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ある夜、雪いたう降りて、表の人音ふけゆくままに、衾^{ふすま}引きかづきて臥^ふしたり。あかつき近うなつて、障子ひそまりあけ、盗人の入り来る。娘おどろいて、「助けよや人々。よや、よや」とうち泣く。野坡^{やば}起き上がりて、盗人に向かひ、「我が庵^{いは}は青氈^{せいせん}だもなし。されど、飯^{めし}一釜^{いっく}、よき茶一斤^{きん}は持ち得たり。柴^{しば}折りくべ、暖まりて、人^{ひと}の知らざるを宝^{たから}にかへ、明け方を待たでいなば、我にも罪なかるべし」と、談話常のごとくなれば、盗人もうちやはらいで、「まことに表より見つるとは、貧福、金と瓦^{かはら}のごとし。さらばもてなしにあづからん」と、覆面^{ふくめん}のまま並びゐて、数々の物語す。中に年老いたる盗人、机の上をかきさがし、句の書けるものをうち広げたるに、

草庵の急火をのがれ出^いでて

わが庵の桜もわびし煙^{けふ}りさき

野坡

といふ句を見つけ、「この火いつのことぞや」。野坡がいはい、「しかじかのころなり」。盗人手を打ちて、御坊^{うわ}にこの発句させたるくせものは、近きころ刑せられし。火につけ水につけ、発句して遊び給^{たま}はば、今宵^{こよひ}のあらましも句にならん。願はくは今聞かん。野坡がいはい、「苦^エ樂をなぐさむを風人といふ。今宵のこと、ことにをかし。されど^オありのままに句に作らば、我は盗人の中宿なり。ただ何^{ナニ}ごととも知らぬなめり」と、かくいふことを書いて与ふ。

垣^{かき}くぐる雀^{すずめ}ならなく雪のあと

(『芭蕉翁頭陀物語』)

〔注〕 ○野坡——芭蕉の門人の志^し太野坡。
○青氈——家の宝物。
○一斤——「斤」はお茶などの重量の単位。
設問

(一) 傍線部ア・イ・ウ・エを、わかりやすく現代語訳せよ。

(二) 「ありのままに句に作らば、我は盗人の中宿なり」(傍線部オ)とあるが、野坡はどういうことを心配しているのか、説明せよ。

(三) 傍線部カは何をぼかして言ったものか、簡潔に答えよ。

第 六 問

(一九九九年・文科)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

右大将道綱の母

嘆きつつひとり寝る夜^ぬのあくる間はいかに久しきものとかは知る

『拾遺集』恋四、「入道摂政まかりたりけるに、門をおそく開けければ、立ちわづらひぬと言ひ入れて侍り^{はべ}ければ、詠みて出だしける」とあり。今宵もやとわびながら、独りうち寝る夜な夜なの明けゆくほどは、いかばかり久しきものとか知り^{たま}給へる、となり。門開くる間^アをだに、しかのたまふ御心にひきあてておぼしやり給へと、このごろ夜^イがれがちな下^ウの恨みを、ことのついでにうち出でたるなり。『蜻蛉日記』に、この門たき給へることを、つひに開けずして帰しまゐらせて、明くるあした、こなたより詠みてつかはせしやうに書けるは、ひがごとなり。「ひとり寝る夜^ウのあくる間は」といひ、「いかに久しき」といへるは、門開くるあひだのおそきを、わび給ひしにくらべたるなり。つひに開けずしてやみたらんには、何にあたりてか、「あくる間は」とも、「久しき」とも詠み出づべき。

(『百首異見』)

〔注〕○入道摂政——藤原兼家(九二九—九九〇)。道綱の母の夫。

○『蜻蛉日記』——道綱の母の日記。

設問

- (一) 「門開くる間をだに、しかのたまふ」(傍線部ア)を、「しか」の内容が明らかになるように現代語訳せよ。
- (二) 「このごろ……うち出でたるなり」(傍線部イ)とはどういうことか、簡潔に説明せよ。
- (三) 「『ひとり寝る夜をあくる間は』といひ……くらべたるなり」(傍線部ウ)とあるが、この解釈にしたがって、「嘆きつ……」の歌を現代語訳せよ。

第三 問

(一九九八年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、丹後国^{たんごのくに}に老尼ありけり。地藏菩薩^{ぢざうぼさつ}は暁^{あり}ごとに歩き給ふといふ事をほのかに聞きて、暁^あごとに地藏見奉らんとて、ひと世界惑ひ歩くに、博打^{ばくち}の打ちほうけてゐたるが見て、「尼君は、寒きに何わざし給ふぞ」と言へば、「地藏菩薩の暁に歩き給ふなるに、あひ参らせんとて、かく歩くなり」と言へば、「地藏の歩かせ給ふ道は我こそ知りたれば、いざ給へ、あはせ参らせん」と言へば、「あはれ、うれしき事かな。地藏の歩かせ給はん所へ我を率^ひておはせよ」と言へば、「我に物を得させ給へ。やがて率^ひて奉らん」と言ひければ、「この着たる衣^{きぬ}奉らん」と言へば、「いざ給へ」とて隣なる所へ率^ひて行く。

尼よろこびて急ぎ行くに、その子に、ぢざうといふ童^{わらは}ありけるを、それが親を知りたりけるによりて、「ぢざうは」と問ひければ、親、「遊びに往^いぬ。今来^{いま}なん」と言へば、「くは、ここなり。ぢざうのおはします所は」と言へば、尼、うれしくて紬^{つむぎ}の衣を脱ぎて取らすれば、博打^エは急ぎて取りて往^いぬ。

尼は「地藏見参らせん」とてゐたれば、親どもは心得ず、「などこの童を見んと思ふらん」と思ふほどに、十ばかりなる童の来たるを、「くは、ぢざう」と言へば、尼、見るままに是非も知らず臥^ふし転^まびて拝み入りて、土にうつぶしたり。童、櫛^{すはえ}を持て遊びけるままに来たりけるが、その櫛して手すさびのやうに額をかけば、額より顔の上まで裂けぬ。裂けたる中よりえもいはずめでたき地藏の御顔見え給ふ。尼拝み入りてうち見あげたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拝み入り参らせて、やがて極楽へ参りけり。されば心にだにも深く念じつれば、仏も見え給ふなりけりと信ずべし。

(『宇治拾遺物語』)

〔注〕 ○博打——ばくちうち。

○櫛——木の細い若枝。

設 問

- (一) 傍線部ア・イ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「来」(傍線部ウ)の読みを記せ。
- (三) 「博打は急ぎて取りて往ぬ」(傍線部エ)とあるが、「博打」はなぜこのような行動を取ったのか、説明せよ。
- (四) この話の語り手は老尼に生じた奇跡をどのように意義づけているのか、説明せよ。

第 六 問

（一九九八年・文科）

先頭に戻る

次の文章は、姫君たちの父が、七日の予定で、阿闍梨あじやりのいる山寺に籠こもって念仏修行をすることになり、その父の帰りを待つ姫君たちの様子と、山寺の様子を語る一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かの行ひたまふ三昧さんまい、今日（けふ）はてぬらむと、いつしかと待ちきこえたまふ夕暮ゆぐらに、人参りて、「今朝よりなやましくてなむ、え参らぬ。風邪かぜかとて、とかくつくろふものするほどになむ。さるは、例よりも対面心アもとなきを」と聞こえたまへり。胸つぶれて、いかなるにかと思し嘆おほき、御衣ぎぞども綿厚わたあくて急ぎせさせたまひて、奉ほうれなどしたまふ。二三日はおりたまはず。いかにいかにと人奉りたまへど、「ことにおどろおどろしくはあらず、そこはかとなく苦しうなむ。すこしもよろしくならば、いま、念じて」など、言葉にて聞こえたまふ。

阿闍梨つとさぶらひて、仕うまつりけり。「はかなき御なやみと見ゆれど、限リミットりのたびにもおはしますらむ。君たちの御事、何か思し嘆くべき。人はみな御宿世ごしゅうせいといふもの異々ことことなれば、御心にかかるべきにもおはしますと」と、いよいよ思エし離るべきことを聞こえ知らせつつ、「いまさらにな出いでたまひそ」と諫いさめ申すなりけり。

（『源氏物語』）

〔注〕 ○三昧——心に仏を念じて経文などを唱となえること。

○阿闍梨——僧の称号。

設 問

- (一) 傍線部ア・ウを現代語訳せよ。
- (二) 「いかにいかにと人奉りたまへど」(傍線部イ)とあるが、誰の^{だれ}どんな気持ちから出た、どのような行為か、説明せよ。
- (三) 「思し離るべきこと」(傍線部エ)とはどんなことか、説明せよ。

第三 問

(一九九七年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、親・兄を殺した「樊噲^{はんかい}」というあだ名の盗賊が、小猿・月夜という手下とともに那須野^{なすの}の殺生石^{せつしょうせき}に到り、通りすがりの一人の僧と出会う場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

下野^{しもつけ}の那須野の原に日入りたり。小猿・月夜いふ。「この野は道ちまたにて、暗き夜には迷ふこと、すでにありき。ここにしばらく休みたまへ。あない見てこむ^ア」とて、走りゆく。殺生石とて、毒ありといふ石の垣のくづれたるに、火切りてたきほこらしをる。僧一人来たる。目も落とさで過ぐるさまにくし。「法師よ、物あらばくはせよ。旅費あらばおきてゆけ。むなしくは通さじ^イ」といふ。法師立ちとどまりて、「ここに金一分^{いちぶ}あり。とらせむ。くふ物は持たず」^ウとて、はだか金を樊噲が手に渡して、返り見もせずゆく。「ゆく先にて若き者ら二人立つべし。『樊噲^{はんかい}に会ひて物おくりし』^エというて過ぎよ」といふ。「応^お」と答へて、足しづかに歩みたり。片時にはまだならじと思ふに、僧立ち歸りて、「樊噲おはすか。我、発心のはじめより偽りいはざるに、ふと物をしくて、いま一分残したる、心清からず。これをも与ふぞ^エ」とて、取り与ふ。手にすゑしかば、ただ心さむくなりて、「かく直き法師あり。我、親・兄を殺し、多くの人を損ひ、盗みして世にあること、あさましあさまし」と、しきりに思ひなりて、法師に向ひ、「御徳に心あらたまり、今は御弟子となり、行ひの道に入らむ」といふ。法師感じて、「いとよし。来よ^オ」とて、つれだちゆく。小猿・月夜、出できたる。「おのれらいつこにも去り、いかにもなれ。我はこの法師の弟子となりて修行せむ。襟^{えり}もとの虱^{しらみ}、身につくまじ。また会ふまじきぞ^オ」とて、目おこせて別れゆく。「無益の子供らは捨てよかし。懺悔^{ざんげ}ゆくゆく聞かむ^オ」とて、先に立ちたり。

(『春雨物語』)

設 問

(一) 傍線部ア・イを現代語訳せよ。

(二) 「『樊噲に会ひて物おくりし』というて過ぎよ」(傍線部ウ)を、人物関係が明らかになるように現代語訳せよ。

(三) 「ただ心さむくなりて」(傍線部エ)について、なぜ樊噲はそう感じたのか、説明せよ。

(四) 「襟もとの虱、身につくまじ」(傍線部オ)とはどういう意味か、説明せよ。

第 六 問

(一九九七年・文科)

先頭に戻る

次の文章は、一条天皇の中宮藤原彰子の生んだ若宮(第二皇子の敦成親王^{あつひら})が東宮に決定した後の、中宮とその父藤原道長(殿の御前)との対話を記したものである。若宮には、皇后藤原定子の生んだ兄宮(第一皇子の敦康親王^{あつやす})がいる。兄宮は、自分が東宮になれるものとの期待をもっていた。これを読んで、後の設問に答えよ。

中宮は若宮の御事の定まりぬるを、例の人におはしまさば、ぜひなくうれしうこそは思しめすべきを、「上は道理のままにこそは思しつらめ。かの宮も、『さりともさようにこそはあらめ』と思しつらむに、『かく世の響きにより、引き違へ思し掟つるにこそあらめ、さりとも』と御心の中の嘆かしうやすからぬことには、これをこそ思しめすらむに、いみじう心苦しういとほしう、若宮はまだいと幼くおはしませば、おのづから御宿世^{すくせ}にまかせてありなむものを」など思しめいて、殿の御前にも、「なほこのこといかでさらでありにしかとなむ思ひはべる。かの御心の中には、年ごろ思しめしつらむことの違ふ^{たが}をなむ、いと心苦しうわりなき」など、泣く泣くといふばかりに申させたまへば、殿の御前、「げにいとありがたきことにもおはしますかな。またさるべきことなれば、げにと思ひたまへてなむ掟て仕うまつるべきを、上おはしまして、あべいことどもをつぶつと仰せらるるに、『いな、なほ悪しう仰せらるることなり。次第にこそ』と奏し返すべきことにもはべらず。世の中いとはかなうはべれば、かくて世にはべるをり、さやうならむ御有様も見たてまつりはべりなば、後の世も思ひなく心やすくこそはべらめとなむ思ひたまふる」と申させたまへば、またこれもことわりの御事なれば、返しきこえさせたまはず。

(『栄花物語』)

〔注〕○上——一条天皇。

設 問

- (一) 傍線部アを現代語訳せよ。
- (二) 「このこといかでさらでありにしかな」(傍線部イ)を、「このこと」「さらで」の内容が明らかになるように現代語訳せよ。
- (三) 傍線部ウで、何が「いとありがたきこと」なのか、わかりやすく説明せよ。
- (四) 「さやうならむ御有様」(傍線部エ)とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。

第三 問

(一九九六年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

初秋風けしきだちて、艶ある夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君、薄色に女郎花などひき重ねて、几帳に少しはづれてゐる給へるさまかたち、常よりもいふよしなくあてに匂ひみちて、らうたく見え給ふ。御髪いとこちたく、五重の扇とかやを広げたらむさまして、少し色なる方にぞ見え給へど、筋こまやかに、額より裾までまよふ筋なく美し。ただ人にはげに惜しかりぬべき人がらにぞおはする。几帳おしやりて、わざとなく拍子うちならして、御箏ひかせたてまつり給ふ。折しも中納言まゐり給へり。「こち」とのたまへば、うちかしこまりて、御簾の内にさぶらひ給ふさまかたち、この君しもぞまたいとめでたく、あくまでしめやかに、心の底ゆかしう、そぞろに心づかひせらるるやうにて、こまやかになまめかしう、すみたるさまして、あてに美し。いとどもてしづめて、騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり。笛少し吹きならし給へば、雲ゐにすみのぼりて、いとおもしろし。御箏の音ほのかにらうたげなる、かきあはせのほど、なかなか聞きもとめられず、涙うきぬべきを、つれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたる小桂に、御髪はこぼれかかりて、少しかたぶきかかり給へるかたはら目、まめやかに光を放つとはかかるをやと見え給ふ。よろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかくたぐひなき御ありさまどもなめれば、よにしらぬ心の闇にまどひ給ふも、ことわりなるべし。

(『増鏡』)

〔注〕 ○大臣——右大臣山階実雄。

○姫君——実雄の娘、佶子。

○中納言——佶子の兄、公宗

○心の闇——「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』・藤原兼輔)による。

設問

- (一) 傍線部ア・ウを、だれのことか明らかにするように現代語訳せよ。
- (二) 「そぞろに心づかひせらるるやうにて」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「つれなくもてなし給ふ」(傍線部エ)とあるが、だれがどのような気持で、どのようにしたのか、わかりやすく説明せよ。
- (四) 「よろしきをだに、人の親はいかがは見なす」(傍線部オ)とはどういうことか、説明せよ。

第六問

(一九九六年・文科)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

むかし相如^{しやうじよ}といふ人ありけり。世にたぐひなきほどに貧しくてわりなかりけれど、よろづのことを知り、才学ならびなうして、琴をぞめでたくひきける。卓王孫といふ人のもとに行きて、月の明かき夜、夜もすがら琴をしらべてゐたるに、この家あるじの娘に卓文君と聞こゆる人、あはれにいみじくおぼえて、常はこれをもめで興じけるを、この文君が父母、相如に近づくことをいとひ憎みけれど、琴の音をやはれと思ひしみにけむ、この男に会ひにけり。女方の父、よろづのたからに飽きみちて、世のわびしきことを知らざりけり。かかれども、このわび人にあひ具したることを、いと心づきなさまに思ひとりて、いかにも娘のゆくへを知らざりけれど、つゆ^ウちり苦しと思はでなむ、年月を過ぐしける。この夫、蜀^{しよく}といふ国へ行きける道に、昇仙橋^{しやうせんけう}といふ橋ありけり。それを歩み渡るとて、橋柱に物を書きつけけり。我^エ、大車肥馬に乗らずは、またこの橋を帰り渡らじと誓ひて、蜀の国にこもりにけり。そののち思ひのごとくめでたくなりてなむ、橋を帰り渡りたりける。女、年ごろ貧しくてあひ具したるかひありて、親しき、うとき世の中の人々も、たぐひなくうらやまれける。

沈みつつわが書きつけしことの葉は雲^オあにのぼるはしにぞありける

心長くて、身をもてけたぬは、今もむかしもなほいみじくこそ聞こゆれ。

(『唐物語』)

〔注〕○相如——司馬相如。前漢の人。

設 問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「我、大車肥馬に乗らずは、またこの橋を帰り渡らじ」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「雲るにのぼるはし」(傍線部オ)とは何をいおうとしているのか、説明せよ。

第三 問

(一九九五年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

世の物知り人の、人の説のあしきをとがめず、一むきにかたよらず、これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心に、あまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人は、いかにそしるとも、わが思ふすぢをまげて、したがふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかかはるまじきわざぞ。大かた一むきにかたよりて、他説をば、わろしとがむるをば、心せばくよからぬこととし、一むきにはかたよらず、他説をも、わろしとは言はぬを、心広くおいらかにて、よしとするは、なべての人の心なめれど、かならずそれさしもよき事にもあらず。よるところ定まりて、それを深く信ずる心ならば、かならず一むきにこそよるべけれ。それに違へるすぢをば、とるべきにあらず。よしとしてよるところに異なるは、みなあしきなり。これよければ、かれはかならずあしきことわりぞかし。しかるを、これもよし、またかれもあしからずと言ふは、よるところ定まらず、信すべきところを、深く信ぜざるものなり。よるところ定まりて、それを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずるところを信ずるまめごころなり。人はいかに思ふらむ、われは一むきにかたよりて、他説をばわろしとがむるも、かならずわろしとは思はずなむ。

(『玉勝間』)

設 問

- (一) 傍線部イ・ウ・エ・カを現代語に訳せ。
- (二) 「二むきにかたよらず」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「それ」(傍線部オ)は、どのような内容を指すか。
- (四) 「かならずわろしとは思はずなむ」(傍線部キ)について、なぜそのように言えるのか、説明せよ。

第六 問

(一九九五年・文科)

先頭に戻る

次の文章は、都から九州に渡った姫君が、土地の豪族に結婚を迫られ、取るものも取りあえず、その地から逃れて帰京するという話の一節である。文中の豊後介ぶんごのすけは、姫君の乳母めのとの長男である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出いで伝へば、負けじ魂アにて追ひて来なむと思ふに心もまどひて、早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危きまで走り上りぬ。ひびきの灘なだもなだらかに過ぎぬ。「海賊の舟にやあらむ、小さき舟の飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来たるにやと思ふにせむ方なし。

うきことに胸のみ騒ぐひびきにはひびきの灘イもさはらざりけり

川尻といふ所近づきぬと言ふにぞ、すこし生き出づる心地する。例の、舟子ふなこども、「唐泊からどまりより川尻おすほどは」と、うたふ声のなさけなきもあはれに聞こゆ。豊後介、あはれになつかしううたひすさびて、「いとかなしき妻子めこも忘れぬ」とて、思へば、「げにぞ、皆うち捨ててける。いかウがなりぬらむ。はかばかしく身の助けと思ふ郎等どもは、みな率ゑて来にけり。我をあしと思ひて、追ひまどはして、いかがしなすらむ」と思ふに、心幼くもかへりみせで出でにけるかなと、すこし心のどまりてぞ、あさましきこエとを思ひつづくるに、心弱くうち泣かれぬ。

(『源氏物語』)

〔注〕 ○ひびきの灘——播磨灘はりま。航行の難所であった。

○川尻——淀川の河口の地名。

○唐泊——播磨国の港の名。

○おす——舟の櫓ろを押す。

設 問

- (一) 傍線部ア・ウを、内容が明らかになるように現代語訳せよ。
- (二) 「ひびきの灘もさはらざりけり」(傍線部イ)にはどのような気持ちがこめられているか、説明せよ。
- (三) 「あさましきこと」(傍線部エ)とはどういうことか、具体的に説明せよ。

第三 問

(一九九四年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ある人はいく、もとよりその道々の家に生まれぬるは、さることなり。さなきたぐひも、ほどほどにつけては、能は必ずあるべきなり。中にも氏をうけたる者、芸おろかにして氏を継がぬたぐひあり、道にあらざるたぐひ、能によりて道に至る徳もあれば、氏を継がむがため、道に至らむがために、かれもこれも^イにはげむべし。何となくゑ交はりたる折はそのけぢめ見えざれども、芸能につけて召し出だされ、ただ^アうちあるわれどちの遊び、かたへに抜き出でて何事をもしたらむは、雲泥の心地して、人目いみじく覚えぬべし。すべてみめよく品高けれども、あやしういやしきが能あるに立ち並ぶ折は、その品そのみめも必ず思ひけたるものなり。たとへば、花のあたりの常磐木^{トキハギ}は、うち見るにたとへなくさめたれども、春の日数暮れ、峰のあらし過ぎぬるのちに、緑ばかり残りて、仮のにほひとどまらざるがごとし。されば、^オ「桃李は一旦の栄花なり。松樹は千年の貞木なり」といへり。いみじくありて身の能なきが一人あるを見るだに、能あるを思ひ出づるならひなり。いはむや、能に並ぶ折のけぢめをや。いかにいはむや、同じ様なるが一人は能ありて、一人は能なきをや。中にも世の中の変りゆくさま、昔よりは次第に衰へもてゆくにつけつつ、道々の才芸もまた父祖には及びかたき習ひなれば、^カ藍よりも青からむことはまことに希なりといへども、形のごとくなりとも箕裘^{きせう}の業を継がざらむ、くちをしかりぬべし。

(『十訓抄』)

〔注〕 ○箕裘の業——父祖の遺業。

設問

(一) 「かれもこれも」(傍線部ア)は、それぞれ何を指しているか。

(二) 傍線部イ・ウ・エを現代語訳せよ。

(三) 「桃李は一旦の栄花なり。松樹は千年の貞木なり」(傍線部オ)について、「桃李」と「松樹」はそれぞれ何をたとえているか。

(四) 「藍よりも青からむこと」(傍線部カ)は、ここではどういうことを指すか、説明せよ。

第 六 問

(一九九四年・文科)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

よろづのこと心細く覚え給ふまに、ただこのことのみ御心にいそがれ給ひつつ、出で給ふたびごとには、女君に、「法師になりて山へまかるぞ」ときこえ給ひければ、「例のこと」と、たはぶれにおぼしてなむ、きこえ給ひける。「まことにこのたびは」ときこえ給ひければ、「例の夜さは帰り給へらむをこそは、法師かへるとは見め」ときこえて笑ひ給ひければ、「まことぞや」ときこえて出で給ひければ、女君、「法師にならむと侍るは、われをいとひ給ふなめり」とて、

あわれとも思はぬ山に君し入らば麓の草の露とけぬべし

ときこえ給へば、高光の少将の君、

わが入らむ山の端になほかかりたれ思ひな入れそつゆも忘れじ

と申し給ひて、愛宮の御もとにまうで給ひて、立ちながら出で給へば、「物きこえむ」とのたまひければ、「などえのぼり給はぬ」ときこえ給ひけれど、涙も出で給ひければ、「いそぎ物へまかる」ときこえ給ひて、ことなることもきこえ給はで出で給ひて、比叡にのぼり給ひて、御弟のおはしける室におはして、とう禪師の君を召して、「かしら剃れ」とのたまひければ、いとあさましくて、禪師の君、「などかくはのたまふ、御心 variability やし給へる」とて、のたまふままに泣き給ふ。

(『多武峰少将物語』)

〔注〕 ○女君——高光の妻。

○愛宮——高光の妹。

○禪師の君——高光の弟。

設問

- (一) 「ただこのことのみ御心にいそがれ給ひつつ」(傍線部ア)を、「このこと」の内容が明らかになるように現代語に訳せ。
- (二) 傍線部イ・ウを現代語に訳せ。
- (三) 「などえのぼり給はぬ」(傍線部エ)を、「のぼる」の内容が明らかになるように現代語に訳せ。

第三 問

(一九九三年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

下^{しも}わたりに、品いやしからぬ人の、こともかなはぬ人をにくからず思ひて、年ごろふるほどに、親しき人のもとへ行き通ひけるほどに、むすめを思ひかけて、み^アそかに通ひありきけり。めづらしければにや、はじめの人よりは心ざし深くおぼえて、人目もつつまず通ひければ、親聞きつけて、年^イごろの人を持ちたまへれども、いかがはせむ」とて、許して住ます。

もとの人聞きて、「今はかぎりなめり。通はせてなども、よもあらせじ」と思ひわたる。「行くべき所もがな。つらくなりはてぬさきに、離れなむ」と思ふ。されど、さるべき所もなし。

今の人の親などは、おしたちて言ふやう、「妻^めなどもなき人の、せちに言ひしにあはすべきものを、かく本意^{ほんい}にもあらでおはしそめてしを、くちをしけれど、いふかひなければ、かくてあらせたてまつるを、世の人々は、『妻すゑたまへる人』を。思ふと、さ言ふとも、家にすゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ』など言ふも、やすからず。げに、さることにはべる」など言ひければ、男、「人数^{ひとかず}にこそはべらねど、心ざしばかりはまさる人はべらじと思ふ。かしこには渡したてまつらぬを、おろかにおぼさば、ただ今も渡したてまつらむ。いと異^{こと}やうになむはべる」と言へば、親、「さら^エにあらせたまへ」と、おしたちて言へば、男、「あはれ、かれもいづちやらまし」とおぼえて、心のうち悲しけれども、今のがやごとなければ、「かくなど言ひて、気色^{けしき}も見む」と思ひて、もとの人のがり往ぬ。

(『はいずみ』)

〔注〕 ○妻すゑたまへる人を——「妻すゑたまへる人」通わすとは、の意。

○やごとなく——「やんごとなく」に同じ。

設 問

- (一) 傍線部ア・イを現代語に訳せ。
- (二) 「げに、さることにはべる」(傍線部ウ)とはどういうことか、具体的に説明せよ。
- (三) 「さだにあらせたまへ」(傍線部エ)とあるが、どうしてほしいというのか、具体的に説明せよ。
- (四) 傍線部オを、「かれ」がだれを指すかがわかるように、現代語に訳せ。

第 六 問

(一九九三年・文科)

先頭に戻る

次の文章は音楽に関する教訓を述べたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

古きやんごとなき人の仰せられしは、「諸道には地獄あり、その価あるがゆゑに。管絃には地獄なし、料物なきがゆゑに」。

うれしくも罪なきことをしけるかな数ならぬ身はこれぞかなしき

かやうのことなりとも、人の心に随ひて、罪あるさまにもしなしつべし。あなかしこあなかしこ、その有様は永く思ひ寄るべからず。好まん人には隠すべからず。その器物かなひたらん人には惜しむべからず。月の明からん夜、よもすがらあそびては、腹立たしからんことをも忘れて、「極楽浄土の鳥の声も、風の音も、池の波も、鳥のさへづりも、これがやうにこそはめでたからめ。とくとくまありてこれを聞かばや」と思ふべし。かやうならば、功德は得とも、罪にはなるべからず。また、これをあながちに隠して、人にはわろうせさせて、心の内には言ひそしり笑ひて、「われひとり人は人にすぐれん。さてよにいみじきものに言はれて、これをせうとくにせん」と思はば、などか罪もなからん。されば、心によるべしと思ふなり。

(『竜鳴抄』)

〔注〕 ○せうとく——所得。儲け。

設 問

- (一) 傍線部イ・ウ・オを現代語に訳せ。
- (二) 「管絃には地獄なし、料物なきがゆゑに」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「かやうならば」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

第三 問

(一九九二年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

西行法師出家しける時、跡をば弟なりける男に言ひ付けたりけるに、いとけなき女子^アのことにかなしうしけるを、さすがに見捨てがたく、いかさまにせむと思へども、うしろやすかるべき人も覚えざりければ、なほこの弟のぬしの子にしていとほしみすべきよし、ねんごろに言ひ置きける。

かくて、ここかしこ修行して歩く^{あり}ほどに、はかなくて二、三年になりぬ。ことのたよりありて、京の方へめぐり来たりけるついでに、ありしこの弟が家を過ぎけるに、きと思ひ出でて、さても、ありし子は五つばかりにはなりぬらむ、いかやうにか生ひなりたるらむと、おぼつかなく覚えて、かくとは言はねど、門のほとりにて見入れけるをりふし、この娘、いとあやしげなる帷姿^{かたびら}にて、下衆^{げす}の子供に交りて、土にをりて、立部^{たてじとみ}の際^{きは}にて遊ぶ。髪はゆふゆふと肩のほどにおびて、かたちもすぐれ、たのみしき様なるを、それよと見るに、きと胸^オつぶれて、いとくちをしく見立てるほどに、この子のわが方を見おこせて、「いざなむ。聖^{ひじり}のある、恐ろしきに」とて、内へ入りにけり。

(『発心集』)

設問

- (一) 傍線部ア・イ・ウ・エを現代語に訳せ。
- (二) 傍線部オについて、どのように感じたのか、またそれはなぜか、説明せよ。
- (三) 傍線部カを現代語に訳し、だれがだれに言ったのか、またそれはなぜか、説明せよ。

第六問

(一九九二年・文科)

先頭に戻る

次の文章は『源氏物語』の一節で、主である尼上の留守に、山里の草庵で、少将の尼と呼ばれる人物が浮舟の女君を慰める場面である。なお、浮舟は入水するところを助けられて、この草庵に養われている。これを読んで、後の設問に答えよ。

つれづれと来し方行く先を思ひ屈くじたまふ。「苦しきまでもながめさせたまふものかな。御碁ごを打たせたまへ」と言ふ。「いとあやしうこそはありしか」とはのたまへど、打たむと思おもしたれば、盤取りにやりて、我アはと思ひて、先せんせさせたてまつりたるに、いとこよなければ、また手なほして打つ。「尼上イ、とう帰ウらせたまはなむ。この御碁見みせたてまつらむ。かの御碁ぞ、いと強かりし。僧都の君、はやうよりいみじう好ウませたまひて、けしうはあらずと思したりしを、『いと碁聖大徳きせいだいとくになりてさし出でてこそ打たざらめ、御碁には負けじかし』と聞こえたまひしに、つひに僧都なむ、二つ負けたまひし。碁聖が碁にはまさらせたまふべきなめり。あないみじ」と興あまずれば、さだ過ぎたる尼額あまびたひの見つかぬに、もの好みするに、むつかしきこともしそめてけるかなと思ひて、心地悪しとて臥ふしたまひぬ。「時々はればれしうもてなしておはしませ。あたら御身を。いみじう沈しみてもてなさせたまふこそくちをしう、玉に瑕きずあらむ心地しはべれ」と言ふ。

〔注〕 ○僧都の君——主の尼上の兄。

○碁聖大徳——碁が上手だった平安時代の僧。ここでは碁の名人の意で用いられている。

設問

- (一) 「我はと思ひて」(傍線部ア)とあるが、だれが、どう思ったのか、説明せよ。
- (二) 「尼上、とう帰らせたまはなむ」(傍線部イ)を現代語に訳せ。
- (三) 「けしうはあらず」(傍線部ウ)を、何が、どうであるのかが分かるように、現代語に訳せ。
- (四) 「むつかしきこともしそめてけるかな」(傍線部エ)とあるが、だれが、どう思ったのか、説明せよ。

第三 問

(一九九一年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

中興^{なかき}の近江の介がむすめ、物の怪^けにわづらひて、浄蔵大徳^{じやうざうだいとく}を験者^{げんじや}にしけるほどに、人とかく言ひけり。なほしもはたあらざりけり。忍びてあり経て、人の物言ひなどもうたてあり、なほ世に経じと思ひ言ひて失せにけり。鞍馬^{くらま}といふ所に籠^{こも}りていみじう行ひをり。さ^アすがにいと恋しう覚えけり。京を思ひやりつつ、よろづのこといとあはれに覚えて行ひけり。泣く泣くうち臥^ふして、かたはらを見ければ、文なむ見えける。なぞの文ぞと思ひて取りて見れば、このわが思ふ人の文なり。書けることは、

墨染めのくらまの山に入る人はたどるたどるもかへり来ななむ

と書けり。いとあやしく、誰^{たれ}しておこせつらむと思ひをり。持て来べきたよりも覚えず、いとあやしかりければ、またひとりまどひ来にけり。かくてまた山に入りにけり。さておこせたりける。

からくして思ひ忘るる恋しさをうたて鳴きつるうぐひすの声

返し、

さても君忘れけりかしうぐひすの鳴く折のみや思ひ出づべき

となむ言へりける。

また、浄蔵大徳、

わがためにつらき人をばおきながら何の罪なき世をや恨みむ

とも言ひけり。この女はに^オなくかしづきて、皇子^{みこ}達上達部^{たちかんだちめ}よばひたまへど、帝^{みかど}にたてまつらむとてあはせざりけれど、このこと出で来にければ、親も見ずなりにけり。

(『大和物語』)

〔注〕 ○中興の近江の介——平中興。平安時代の官人。

○浄蔵大徳——三善清行の子。平安時代の高僧。

設 問

(一) 傍線部ア・ウ・オを、だれのどういう状態または行為であるかがわかるように、それぞれ現代語に訳せ。

(二) 傍線部イ・エを現代語に訳せ。

第 六 問

(一九九一年・文科)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

宗俊^{むねとし}の大納言、御母は宇治大納言隆国^{たかくに}のむすめなり。管絃の道すぐれておはしましける。時光^{ときみつ}といふ笙^{しやう}の笛吹きに習ひ給ひけるに、大食調^{たいしきてう}の入調^{にふてう}を、「いまいま」とて、年へて教へ申さざりけるほどに、雨かぎりなく降りて、暗闇^{くらやみ}しげかりける夜、出で来て、「今宵、かのもの教へたてまつらむ」と申しければ、よろこびて、「とく」とのたまひけるを、「殿の内にては、おのづから聞く人も侍らむ。大極殿^{だいごくでん}へ渡らせ給へ」といひければ、さらに牛など取り寄せておはしけるに、「御共^アには、人侍らでありなむ。時光ひとり」とて、蓑笠^{みのかさ}着てなむありける。大極殿におはしたるに、「なほおぼつかなく侍り」とて、続松^{つぎまつ}取りて、さらに火ともして見ければ、柱に蓑着たる者の立ち添ひたるありけり。「かれは誰^{たれ}ぞ」と問ひければ、「武能^{たけよし}」と名のりければ、「さればこそ」とて、その夜は教へ申さで、歸りにけりと申す人もありき。また、「かばかり^ウこころざしあり」とて、教へけりとも聞こえ侍りき。それはひがごとくにや侍りけむ。

(『今鏡』)

〔注〕 ○大食調の入調——笙の秘曲の一つ。

○武能——平安時代の樂人。

設問

- (一) 「御共には、人侍らでありなむ」(傍線部ア)を現代語に訳せ。
- (二) 「なほおぼつかなく侍り」(傍線部イ)を、何が「おぼつかな」いかがわかるように、ことばを補って現代語に訳せ。
- (三) 「かばかりこころざしあり」(傍線部ウ)とあるが、だれの、どういう行動が、どういうふう判断されるというのか、説明せよ。

第三 問

(一九九〇年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

東北院の菩提ぼだいかう講始めける聖は、もとはいみじき悪人にて、人屋ひとやに七度ぞ入りたりける。七度といひける度、検非違使けびゐしども集まりて、「これはいみじき悪人なり。一、二度人屋にゐむだに、人としてはよかるべきことかは。ましていくそばくの犯しをして、かく七度までは、あさましくゆゆしきことなり。この度これが足切りてむ」と定めて、足切りに率ゑてゆきて、切らむとする程に、いみじき相人さうじんありけり。それが物へいきけるが、この足切りむとする者に寄りて言ふやう、「この人、おのれに許されよ。これはかならず往生すべき相ある人なり」と言ひければ、「よしなきこと言ふ、物も覚えぬ相する御房ごぼうかな」と言ひて、ただ切りに切らむとすれば、その切らむとする足の上に登りて、「この足の代りに、わが足を切れ。往生えすべき相ある者の足切らせては、いかでか見むや。おうおう」とをめきければ、切らむとする者どもしあつかひて、検非違使に、「かうかうのこと侍り」と言ひければ、やんごとなき相人の言ふことなれば、さすがに用ゐる者もなく、別当に、「かかることなむある」と申しければ、「さらば許してよ」とて、許されにけり。その時、この盗人心おこして、法師になりて、いみじき聖になりて、この菩提講は始めたるなり。まことに相かなひて、いみじく終りとりてこそ失せにけれ。

かかれば、高名たかみちせむずる人はその相ありとも、おぼろけの相人の見ることにてもあらざりけり。始めおきたる講も今日まで絶えぬは、まことにあはれなることなりかし。

(『宇治拾遺物語』)

〔注〕 ○東北院の菩提講——極楽往生を願って、念仏を唱え、法華経を講ずる法要。

○人屋——獄舎。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウ・オを現代語に訳せ。

(二) 「往生すべき相ある者の足切らせては、いかでか見むや」(傍線部エ)とあるが、相人はなぜそう言ったのか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「高名せむずる人はその相ありとも、おぼろけの相人の見ることにてもあらざりけり」(傍線部カ)とあるが、どういうことを言おうとしているのか、わかりやすく説明せよ。

第 六 問

(一九九〇年・文科)

先頭に戻る

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

昔、男ありけり。いかがありけむ、その男アすまずなりにけり。のちに男ありけれど、子ある仲なりければ、こまかにこそあらねど、時々もの言ひおこせけり。女がたに、絵描カく人なりければ、描きにやれりけるを、今の男のものすとて、一日二日おこせざりけり。かの男、いとつらく、「おイのが聞こゆることをば、いままでたまはねば、ことわりと思へど、なほ人をば恨ウみつべきものになむありける」とて、弄スウじて詠ヨみてやれりける。時は秋になむありける。

秋の夜は春日忘るるものなれや霞に霧や千重チヘまさるらむ

となむ詠めりける。女、返し、

千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉ウも花もともにこそ散れ

(『伊勢物語』)

設 問

- (一) 「すまずなりにけり」(傍線部ア)とは、どういうことか説明せよ。
- (二) 「おのが聞こゆることをば、いままでたまはねば」(傍線部イ)とあるが、具体的な状況がわかるように現代語に訳せ。
- (三) 「紅葉も花もともにこそ散れ」(傍線部ウ)とあるが、どういう気持ちがかめられているか、説明せよ。

第三 問

(一九八九年・文理共通)

先頭に戻る

次の文章は、福原の京から京都に還都のことが議せられた際の一挿話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

六波羅の太政入道、福原の京建てて、みな渡りゐてのち、ことのほかに程経て、古京と新京といづれかまされるといふ定めをせむとて、古京に残りゐたるさもある人ども、みな呼び下しけるに、人みな入道の心をおそれて、思ふばかりも言ひ開かざりけり。長方卿ひとり、少しも所^イをおかず、この京をそしりて、言葉も惜しまず散々に言ひけり。さて、もとの京のよきやうを言ひて、つひにその日のこと、かの人の定めによりて、古京へ還るべき儀になりけり。のちにその座にありける上達部の、長方卿にあひて、「さてもあさましかりしことかな。さばかりの悪人の、いみじと思ひて建てたる京を、さほどにはいかに言はれしぞ。言ひおもむけて帰京の儀あればこそあれ、言ふかひなく腹立ちなば、いかがし給はむ」と言ひければ、「このこと、我思ふには、さる儀あり。入道の心に叶はむとてこそ、さは言ひしか。そのゆゑは、広く漢家・本朝を考ふるに、よからぬ新儀行ひたる者、初めに思ひ立つ折は、なかなか人に言ひ合はすることなし。そのしわざ少しくやしむ心ある時、人には問ふなり。これも、かの京ことのほかにゐつきてのち、両京の定めを行ひしかば、はやこのことくやしうなりけりといふことを知りなき。されば、なじかは言葉を惜しむべき」とぞ言はれける。まことに、そののちに人に越えられむとしける時も、この入道、よきやうに申し、「長方卿はことのほかに物覚えたる人なり。たやすく人に超越せしむべからず」とて、のちまでも方人をせられけるなり。梅小路中納言の両京の定めとて、その時の人の口^カにありけり。

(『続古事談』)

〔注〕 ○六波羅の太政入道——平清盛。

○長方卿——藤原長方。梅小路中納言と呼ばれた。

○超越——上位の者をとび越えて位階が昇進すること。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウ・カを現代語に訳せ。

(二) 「さる儀あり。入道の心に叶はむとてこそ、さは言ひしか」(傍線部エ)について、長方はなぜそのように考えたか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「のちまでも方人をせられけるなり」(傍線部オ)について、清盛はなぜそうしたのか、説明せよ。

第 六 問

(一九八九年・文科)

先頭に戻る

次の文章は『源氏物語』の一節で、親の家を訪れた男が、二人の妹と会っている場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

「内裏^{うち}わたりなどまかり歩き^{あり}ても、故殿おはしまさましかば、と思ひたまへらるること多くこそ」など、涙ぐみて見たてまつりたまふ。二十七八のほどにものしたまへば、いとよくととのひて、この御ありさまどもを、いかでいにしへ思しおきてしに違^{たが}へずもがなと思ひゐたまへり。御前の花の木どもの中にも、にほひまさりてをかしき桜を折らせて、「ほかのには似ずこそ」などもてあそびたまふを、「幼くおはしましし時、この花はわがぞわがぞと争ひたまひしを、故殿は、姫君の御花ぞと定めたまふ。上は、若君の御木と定めたまひしを、いとさは泣きののしらねど、安からず思ひたまへられしはや」とて、「この桜の老木になりにけるにつけても、過ぎにける齡^{よはひ}を思ひたまへ出づれば、あまたの人に後れはべりにける身の愁へもとめがたうこそ」など、泣きみ笑ひみ聞こえたまひて、例^うよりはのどやかにおはす。人の婿になりて、心静かにも今は見えたまはぬを、花に心とどめてものしたまふ。

〔注〕 ○故殿——兄妹の亡き父大臣で、生前、姫君を入内^{じゆだい}させようと願っていた。 ○上——兄妹の母。

設問

- (一) 「いときは泣きののしらねど、安からず思ひたまへられしはや」(傍線部ア)は、誰のどんな気持ちか、説明せよ。
- (二) 「あまたの人に後れはべりにける身の愁へ」(傍線部イ)を、わかりやすく現代語に訳せ。
- (三) 「例よりはのどやかにおはす」(傍線部ウ)とあるが、「例」とはどのような様子か、説明せよ。